元暗殺者、宮益坂女子学園へ赴任する

俺っちは勝者の味方ー！

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

プロセカのキャラ達を暗殺教室出身の現教師が教え導くお話。

※連載小説の形ではあるけど、感想や評価次第で短編集にする可能性アリ。

※全然続く気しないので、タグも最低限。

目次

始業の時間 1
優等生の時間 4
一番星の時間 9
《手入れ》の時間 15
体育祭の時間・2時間目 24
デートの時間 33
デートの時間・2時間目 42
ストリートの時間 58
文化祭の時間 72
大人の時間・3時間目 86
思い出の時間 92
相談の時間 104
名人の時間 121
プロの時間・3時間目 135

始業の時間

四月。

新しい学校、新しいクラスの教壇に上がる度に、僕の心は春風のようにざわめき止まない。こういう瞬間（とき）感じる不安や心配はこの先どんなに経験を積んでもなかなかに慣れない気がする。…いや、今まで在籍してきた高校との雰囲気の違いからくる緊張のせいだ、きっと。

なぜなら、ここは都内でも有数の女子校こと宮益坂女子学園。正直のところ、立派な男性教諭である僕ーーー潮田　渚が赴任するには場違い感が否めない。

初めこそ転任のお誘いを断ったものの、その後もほぼ連日貰い続けるお声がけに僕は折れざるを得なかった。それだけ押しが強いのは僕を正当に評価してくれているのだと、素直に嬉しく感じたからでもある。

言わずもがな、教員免許取得以降濃い個性を持った男子生徒ばかりの私立極楽高校でしか教員生活を送ってこなかった僕に、女子校で教鞭を振るった経験など皆無に等しい。『せめて共学での経験値さえあれば…』と弱音が過ったりもした。

だが、悲観するヒマがあるなら、これからガラッと一変するであろう日常を楽しもうと前を向いた。どこから聞きつけたのか、そんな僕の新たな門出を教育実習生時代からのＯＢを筆頭に多くの生徒が泣きながら祝ってくれたっけ……。

「よし…！」

嬉しい思い出に浸りながら、胸を張り、視線を高く持ち上げる。初めて対面する２ーＢの皆んなを安心させられるような最高の笑顔も作って、僕は教室の扉に手を掛けた。

ーーーーーー始業のベルが鳴り響く。

さあ、宮女での初仕事だ。

◆◇◆◇◆◇◆◇

「初めまして！君たち2年B組の担任を務める、潮田渚です。今年度から宮益坂女子学園に赴任してきたのでまだわからないことだらけだけど、僕もたくさん学んで精いっぱい頑張ります！これから一年間よろしくね！」

と、教室中の視線を一身に浴びながらも、臆することなく自己紹介を終える。入室してすぐに「あの人が担任？」「女の人？それとも男？」「か、かわいい！」とか…少々聞き捨てならない内容も含めたコソコソ話が耳に入って内心ドキリと心臓が跳ね上がったが、好奇の眼差しに負けず僕はやりきった。

拍手の数や女生徒たちの反応から察するに、良い感じに僕の第一印象が伝わってくれたのだろう。皆んなの表情は朗らかになっていた。

だからこそ、だろうか。

ただ一人異質な雰囲気を放つ生徒の存在に僕は気が付いてしまった。今にも吸い込まれてしまいそうな紫紺の髪と整った顔立ちが特徴的な彼女は意識の波長を揺らすことなく、クラスメイトと同様に穏やかな笑顔を浮かべて拍手をしてくれている。

『表面上では笑っているけれど、その実何も感じていない』…至極単純かつおおよそ女子高生にはあり得ないその事実に、僕の背筋は凍り

付く。感情の起伏が読み取れず、まるで彼女の心電図だけが止まっているかのようにも思えた。
同時に、彼女の背中に子どもでは背負い切れない重荷の存在を直感する。

『これはまた、違った意味での問題児なのかもしれないなあ…』

これが僕と、僕の教員生活史上最恐の問題児…朝比奈まふゆさんとの初めての出会いだ。

優等生の時間

私のクラスの担任になったという先生は、この学校では珍しい男の先生だった。短く綺麗に切り揃えられた水色の髪に小さな体躯をしているから、私たちと同い年くらいの女の子だと言われても不思議に思わない。

潮田　渚先生…クラスメイト曰く美形の男性教師だという彼が来たからか、周りはいつになく盛り上がっていた。ＨＲの時間の半分が潮田先生への質問責めで失われるほどに。

私も興奮している様子を装い、ただ時間が過ぎるのを待っていた。新しい担任がどんなに物珍しくとも、そんなことはどうでもよかったから。

浮き足立つクラスメイトの話に相槌を打ったり、先生の第一印象の良さに共感したり、私は優等生らしく振る舞った。一方の潮田先生は終始困ったような表情をしていたが、質問を無理やり切り上げようとはせず、その一つ一つを丁寧に返していて楽しそうだったと皆んなは言う。

『困っているのに楽しい』。私には…その理由がよくわからなかった。

それとＨＲの途中。ほんの一瞬だけ私の体を鋭い視線が貫いた気がしたけれど、あれは何だったんだろう…？

◆◇◆◇◆◇◆◇

始業式の日から二週間が経った。

あれから一つわかったことがある。それは、潮田先生の授業はこの上なく解りやすいということ。

英語を担当科目とする先生は私たち二学年だけでなく、一・三学年の授業も請け負っているそうで、その全ての評判がとにかく高い。

それにただ解りやすいだけでなく、『丁寧』『効率的』『覚えやすい』『楽しい』『優しい』の五拍子も揃った授業が大多数の生徒に大ウケし、学年問わず引っ張りだこなのだとか。

加えて、授業の時だけでなく業間や昼休み、放課後にも生徒と積極的にコミュニケーションを試みる人柄の良さも相まって、その人気っぷりに拍車を掛けているそう。

…と、クラスメイトが話してくれた。普通の『先生』とは一線を画したような担任、潮田先生のありのままを理解はしたけれど、やっぱり何も感じることはない。どうせ、あの人も同じ…。だから…

「朝比奈さん。これから朝予告した二者面談をしようと思うんだけど、今時間空いてるかな？」

「はい。大丈夫です」

いつも通り優等生を演じ続けよう。

◆◇◆◇◆◇◆◇

「名目上二者面談って堅い言い方をしてるけど、そんなに緊張しなくても大丈夫。肩の力を抜いて気楽にいこうか」

「わかりました。よろしくお願いします、潮田先生」

新しいクラスに変わったこと、交友関係について不安に思うところはないかと…漠然とした、けれど私を気遣った質問から先生との面談は始まった。

「クラスの友達との仲は良好ですし、今のところ困ったことは特にありませんね」

「それは良かった。よく朝比奈さんが友達に勉強を教えている姿を見かけるから、少し心配してたんだ。根を詰め過ぎないよう程々にね」

？　去年からいつも通り過ごしているだけなのに、そんなに心配するものなの…？まるで自分のことのように安心したり、心配したりする潮田先生のことがますますよくわからない。

「？　どうしたの、朝比奈さん？」

「っ。ふふ…いいえ。潮田先生の反応があまりにも女の子らしくて」

「いや何度も言うけど僕男だからね!?」

……ツッコミのキレがやたら鋭いのはもっとわからない。

◆◇◆◇◆◇◆◇

「ーーーーーさて、そろそろ進路について話そうか。確か、朝比奈さんの第一志望校は私立東京医師大学…都内でもトップクラスの難関校だけど、君の学力なら受かるチャンスは十分にある大学だね」

「…はい」

それから至って真剣に進んだ面談は進路の話題に移る。そして、開口一番に告げられたのはこれまで幾度となく聞いてきた言葉。潮田先生も成績を見て、お母さんやお父さんと同じように私に医者になってほしいと思っているのだろう。

私は否定せずに、首を縦に振った。

「……そうだなあ。医大を目指しているなら、一度僕に聞かせてくれないかな？君が医者を目指すその理由(わけ)を」

「え」

妙な間を空けてから先生にそう問いかけられ、私は固まった。このタイミングで質問されるのは初めてだったし、彼の視線が真っ直ぐ私を捉えて離そうとしない。

何より医者になりたい理由なんて持っていないから。強いて挙げ

るなら、母からの薦めとしか言えず、それらしい理由は……ダメ。何も、無い…。

「ーーーーーなんて、いきなりこんな意地悪なことを聞かれてもすぐには答えられないよね。本当にごめんなさい、朝比奈さん」

「…あ。いえ、気にしないでください。うまく考えをまとめられなかった私の方に責任がありますから」

『良い子』を装うための、なんとも都合のいい嘘。私にはそのまとめるべき考えの一つすら持っていない。

…潮田先生が顔を上げると、そこには普段と変わらない柔らかい笑顔があって、思わず萎縮してしまうような視線の面影すら無かった。

この先生の思惑が、わからない。

「うん。それなら朝比奈さんの意志がしっかりと固まったら今度こそ僕に教えてほしい。一番大事なのは君自身が君の意志をはっきり示すことだから」

「……」

「さあ、いい時間だしそろそろ終わろうか。次の順番の子に声をかけてきてくれるかな?」

「…わかりました。失礼します」

なんとなく、この先生と顔を合わせているのが怖くなった…このまま話を続けると仮面越しに『本当の私』を見透かされてしまいそうで。急いで職員室から逃げたいと心音がうるさく脈動する。

「朝比奈さん」

「!」

去り際にかかる声。思わず私は息を呑んだ。

「今日はありがとう。こうして君と話すことができて本当に良かった」

「…はい。こちらこそ、ありがとうございました」

潮田　渚ーーーーまだよくわからないし油断の隙もない先生だけど、私と本気で向き合おうとしてくれた大人…な気がする。

一番星の時間

進学校なだけあって、宮女の学力レベルは高水準だ。
前の学校と同じように…殺せんせーの授業から着想を得た僕なりの教え方が果たしてここでも通用するのかと不安を感じていたけれど、存外これが功を奏している。
例を挙げるなら、勉強が苦手だという子はその問題を解けない理由を自力で解き明かしたり、元々勉強のできる子は得意な科目をさらに伸ばすきっかけを掴めるようになったり、などなど…僕の授業は多くの生徒に様々な影響を与えられた。
それも嬉しく思うけど、僕が個人的に注目しているのは実は平均的な成績の生徒たちだったりする。授業を通して、自分の足りない要素をどのように補って本番に活かしてくれるのかが楽しみだからね。
最近は僕の元へ質問しにきてくれる子も多くなった。小テストの作成やら授業の要点の網羅やらと併せて質問に答えるので忙しくはあるが、それよりも楽しい気持ちの方が勝るので一切苦には感じていない。
一つ不満を挙げるとするなら……

「失礼します、なぎちゃん先生！この構文の解き方のコツを教えてください！」

…僕は男性として見做されていないのかもしれない。お互いの緊張を早くほぐすためにと生徒との交流を図りまくっていたら、いつの間にかこの頼れる友人的な距離感が成り立っていた。こと放課後個別に訪れる生徒はラフというか、フレンドリーである。

「こら。その呼び方はやめるようにって言ったはずだよ、天馬さん」
「えへへ、ついうっかり。ごめんなさい～」

その代表とも言えるのが1年C組の天馬　咲希さん。二日に一度の頻度で職員室に顔を出してくれる彼女の目標は『テストで満点を取る』ことだ。それを実現させるために熱心に勉強に打ち込む姿を見ていると、嬉しさの余り込み上げてくるものがある。
何より、生徒のやる気に全力で応えるのが教師の役目。だから、
「今日もみっちり教えていくよ。君がテストで満点を取れるよう応援してるけど、僕も手を抜くつもりは一切ないからそのつもりでね」
「はい！よろしくお願いします、なぎちゃん先生！」

うう…僕の教師としての尊厳、どこ……？

◆◇◆◇◆◇◆◇

「あ、あれ？この問5の語順、どう並び替えるのが正解だっけ？」
「この問題は〝動詞＋副詞〟で作られた熟語がポイントだね。目的語が代名詞のときだけ使えるルールを思い出してみて」
「う～んと……そうだ、わかった！これ、代名詞はサンドイッチにしなきゃいけないんだった！」
「ふふふ。そうそう」

☆

「天馬さん。その古文と世界史の教科書…」
「あ。これですか？なぎちゃん先生以外にも質問しにいきたい教科の先生がいるので、それ用に持ってきてるんです」
「へえ。一教科だけの勉強に満足しないなんてすごく熱心なんだね」
「いや～、そんなことありませんよ」
「……」
「先生？」
「努力家な天馬さんに一つ提案。君さえ良ければ、僕がその教科の中

でわからないところ…教えてあげようか？」
「え……えええ～!?」

☆

「ーーーーーはい。よく頑張ったね、お疲れ様」
「す、すごい。先生、英語以外も教えるの上手すぎるよ…」

僕と天馬さんによるマンツーマンの個別指導が終わる頃にはすっかりお天道様の顔は見えなくなっていた。相当気合いを入れていたのだろう、天馬さんの表情には疲労の気色が浮かんでいる。手を抜くつもりはないとは言ったけど、休憩も無しにほとんどぶっ通しで勉強をするのは些かハードすぎたのかもしれない。
…うん。今英語科の職員室には僕しかいないし、もう少しだらけさせてもバチは当たらないよね。

「天馬さん、勉強してる時すごく楽しそうな表情だったよね。今も疲れてるみたいだけど、それ以上に嬉しそうだ」
「あはは。わかっちゃいます？」

素直で人懐こい笑顔が魅力の天馬さん。この一週間でもっといい笑顔をするようになった彼女の近況について聞いてみたいと思った。
そんな僕から振られた話題に、幸せな感情を噛み締めるように天馬さんは話してくれた。曰く、長らく疎遠だった幼馴染と復縁し、かつてのような親しい仲に戻れたこと…『普通』の学生らしく、勉強や部活やバイトを頑張れることがとても嬉しかったんだと。

「また昔みたいにいっちゃんたちとバンドを組んだんです。ブランクもあってまだまだ下手っぴだけど、私たちの想いが誰かの心に響くような演奏ができたらいいなって」
「……すごい、素敵な夢だ。君の目が輝いて見えたのは僕の勘違いな

んかじゃなかったみたい」

僕が褒めちぎると天馬さんは「えっへん！」と自慢げに胸を張った。高校生活がスタートして間も無く…大なり小なり抱えているであろう不安をものともせず夢に向かって一直線に突き進む彼女は、教師という役柄に関係なく応援したくなる。

「でも…目標に向けて頑張る努力と同じくらい、天馬さんには自分の体を大切にして欲しいな」

「えっ？」

「親から貰った、たった一つしかない贈り物だからね」

僕の突然の独白に天馬さんは思わず呆けているけど、それでも僕は自分の胸中を語ることを止めない。

遠く彼方で羨望の眼差しを向けるだけだった憧れが、今では天馬さんの手の届くところに五万と並んでいる上に、彼女にはその青春を存分に謳歌する義務がある。成功や楽しいことばかりでなく、その中で多少の羽目を外してしまうのも失敗や挫折に苦い思いをするのも、きっと大事な経験の一つとして刻み込まれるはずだ。

しかし、全ては心身共に健やかであってこそ真に意義のあるものになるのだと、僕はそう考える。

「色々なことにチャレンジしてみたい気持ちはよく分かる。けれど、焦り過ぎる必要はない。頑張る時には精いっぱい頑張って、時にはゆっくりと…自分のペースで歩くことも大切なんだよ」

「自分のペースで、ですか？」

「うん。それとも…その幼馴染は君が立ち止まってしまった時、落ち込んでいる時に、君を置いていってしまうような子たちなのかい？」

「！　そんなことありません！しほちゃんの練習はちょっと厳しいけど、こまめにアタシの体調を気遣ってくれるし、いっちゃんやほなちゃんだって…みんなすっごく、すっ～～ごく優しいです！」

「…ふふ。自信を持ってそう言えるなら、きっと何も心配はいらないんじゃないかな。天馬さん」
「あ～!!今のもしかしてわざとなの!?
もう！なぎちゃん先生の意地悪～！」

頬を膨らませながら怒っている天馬さんの声色は、要所要所にわざとらしさが混ざっていて不自然だ。多分、照れ隠しなのかな。
それからやいのやいのと騒ぐ彼女の様子はなんとも微笑ましかったが、本人が徐々に落ち着きを取り戻し始めると、僕にこんなことをお願いしてきた。

「じゃあ、明日の放課後アタシたちのバンド練習見に来てよ。アタシといっちゃんとほなちゃんとしほちゃんの本物の『絆』、先生に証明してあげる！」
「へえ？…楽しみにしてていいんだね？」
「もっちろん！」

僕自身、世辞にも音楽への造詣が深いとは言えないし、彼女たちに専門的なアドバイスをかけてあげることはおそらく不可能だ。
けれど、先生に本気で『想い』をぶつけようとしている生徒がいるのに、それに応えられずして教師を名乗れるわけがない。

受けて立とう。そして、受け止めよう。天馬さんたちの本気の努力の結晶を。
殺せんせーが命を懸けて、僕たちにそうしてくれたように。せんせーの教え子として恥じない教師でいたいから。

そして後日…僕が天馬さんたち幼馴染組で結成されたバンド、Ｌｅ

ｏ／ｎｅｅｄの演奏に思わず涙ぐむことになるのはまた別の話。

《手入れ》の時間

「皆んな、さっきは本当にありがとう。この親子コウテイペンギンのマスコット、大事にするね」
「もう…すっかり骨抜きじゃない。まだ口元が弛んでるわよ、遥」

私たち《ＭＯＲＥ　ＭＯＲＥ　ＪＵＭＰ！》は今日、雫の提案で練習の息抜きにと休日をのんびり満喫していた。カラオケに、アロマキャンドル作りに、ショッピングに…言い出しっぺの雫がいつもよりドジを踏むことが多かった気もするけど、そういうハプニングもひっくるめて思い出深く楽しい一日になったと思うわ。遥はまだペンギンカフェの余韻に浸ってるみたいだけどね。

「あら、大分日も落ちて暗くなってきちゃったわ」
「うわ…。よく見たらここ、人通りも少ないし、壁に落書きもされてるじゃない。早いとこ大通りに出ましょう」
「う、うん！」

脇道を通って駅までの帰り道をショートカットするつもりだったんだけど、正直迂闊だったわ。路地裏じゃないから大丈夫だなんて高を括ってたら、まさかこんなにも物騒な雰囲気が漂っているなんて…。

みのりの声もちょっと震えてるし、急いでここからーーーーーー

「ほんとほんと、女だけでよくこんな人目が付きにくい場所通れるねぇ。お兄さん、心配しちまうよ」
「！」
「ま。そっちの方が俺らにとって好都合だがな」

っ…最悪ね。私たちの前方、狭い路地の影から現れた学ラン姿の男が軽薄そうな声で喋りかけてくる。タチの悪い軟派って考えが一瞬頭を過ったけど、そいつの『格好の獲物』を見つけたような、下卑た視線を真っ向から浴びて悟ったわ。…こいつは救いようのないクズ野郎だって。

「くはは♪美人な姉ちゃんが四人もいらぁ、今日は最高についてるぜ」

「きゃっ…！」

そいつに続いて、前だけでなく後方からも現れた下っ端らしい男たちに囲まれ、みのりが小さく悲鳴を上げる。…まずい、今ので完全に逃げ場が無くなった…。

女子高生四人に対して、大柄な男子高校生が合計七人。既に絶望的な状況だけど、私は一握りの可能性を信じて賭けに出る。

「ちょっとアンタたち、寄ってたかってどういうつもりよ！返答次第じゃ今すぐ警察に通報してやるから！」

「あ？お前らこそ状況わかってんの？下手に逆らったらタダじゃ済まねえことくらい想像つくだろ」

「…っ！」

「はっ。なあに…大人しくしときゃすぐに済む。

俺たちとほんの少しイイコトするだけさ」

その瞬間、怒りで目の前が真っ赤に染まった。最低なことを口走った男の顔を思いっきりぶっ叩いてやろうと、考えるよりも先に体が動いていた。

「え…？」

けれど、私が振り翳した手の勢いは殺された。いとも簡単に。強い力で手首を掴まれ心が折れかける。
そうだ…いかにも喧嘩慣れしていそうな奴らに女の私が力勝負で勝てるわけがない。

それでも諦めたくなくて、必死に抵抗した。

「はっ、離して！」
「愛莉ちゃん！」
「威勢だけは一丁前だな。だが、お前みたいな気の強え女ほど、屈服させる甲斐があるってもんだ。お楽しみの会場に連れてったら、すぐに逆らえなくしてやーーーーーー」

「君たち、僕の生徒に何をしているのかな？」

周囲に響いたこの恐ろしく冷たい声には、何故か聴き覚えがあった。普段は優しさを全面に押し出したような声色しか聴いたことが無かったけれど、間違えるはずがない。誰もが驚きで固まっている中、遥がその声の主の名を一番に叫んでくれた。

「渚…先生！」

宮女の英語教師こと潮田　渚先生。
男性教師でありながら、女性顔負けの可愛らしさを併せ持ち、穏やかな笑顔が魅力のこの人の目は今、一切笑っていない。まるで親の仇

でも見るような険しい表情のまま、先生は不良たちとの距離を狭めてゆく。至って自然に、堂々と歩いて。

「ああ？先公ダァ？ざけんじゃねえ…こんな女みてぇな野郎に邪魔されてたまるか！やれ！」

！　ダメ…あんな一斉に囲まれたら、先生がっ！

「〃　ふざけるな　〃？」

「それは僕のセリフだよ。

ハエが止まるような汚い手で、大事な生徒に触れるな」

◆◇◆◇◆◇◆◇

「な、ん…」

すれ違いざまに、不届きな輩の一人に手刀を見舞う。間の抜けた声と共に、為す術なく崩れ落ちてゆくのを見て確信した。彼らは集団を成しているが、実際その間に戦略的連携は存在しないと。

三人同時に襲い掛かってきたのに、結局僕の間合いに入り込んだのは一人だけ。つまりは、仲間での同士討ちを恐れていることに他ならない。

彼らが振るうは個の力だ。極楽高での刺激的（？）な五年間を過ごした僕にとっては恐るるに足らず…そこから先は制圧作業にも等し

かった。

「らあっ！」

「っ。」

攻撃のほとんどが馬鹿正直で短絡的。より鋭い第二撃の警戒をしていても、そういった追撃は現状一度も繰り出されずにいた。脇も甘く隙だらけな拳はわざわざ捌いてやるまでもない。

そして、油断した・疲弊したところへアイアンクローや搦め手を仕掛けるだけで、いつの間にか相手の戦力は半壊していた。

「ちくしょう！当たらねえ！」

そんな烏合の衆の中でも、武道を心得ていそうな輩はやはりいた。力も業（わざ）もあり、さっきのよりは強い。

「……ふんっ！」

「ごっ……！」

けれど、女性に手を上げるような未熟者よりも少しだけ長生きしている僕の方が、少しだけ強い。

十二年間で積み上げてきた経験と技術と度胸を以て、半端な業にそれ以上に洗練された業で返す。学校で生徒に《手本》を見せるのと同じように。

「か、踵落とし…！

（あのチビ、タダモンじゃねえ…）」

残るは桃井さんを乱暴に扱おうとした主犯格ただ一人。肝心の桃井さんは呆然とする彼の拘束から難なく逃れ、日野森さんたちに匿わ

れながら物陰に身を潜めている。…ああ、無事で良かった。

これで心置きなく……殺(や)れる。

この時点で、彼の中で〝逃げ〟という選択肢は消えていたんだろう。初めて目にする本物の殺意に縛られ、いかに動くべきか正解がわからなくなっている。意識の波長が全て教えてくれた。

たった今芽生えたばかりでも、そこに《殺される恐怖》があるのなら……

パアアン

僕の《暗殺(手入れ)》は完璧に事を運べる。

「…が……」

「もしまた彼女たちにその汚い顔を見せたらどうなるか、わかるよね？」

「……ひえっ…」

ナイフを抜く感覚でペン先を頸部に突き付けると、男は口から泡を吹いて気絶した。

もうこんな人たちを気にしていられない。僕はすぐさま桃井さん

たちの元へ駆け寄っていった。

◆◇◆◇◆◇◆◇

「桃井さん、みんな、怪我はない？」

って、渚先生が心配してくれてるけど……いやいや、安心よりも驚きの方が勝っちゃうわよ、これ!?

草食系男子が巨漢どもを圧倒しちゃう絵面だけでもすごいのに、その張本人が私たちのよく知る宮女の英語教師ってのもあって数倍衝撃的ね。

「ひゃ、ひゃい！おかげでなんともなかったです。ありがとうございます、渚先生！」

「「あ、ありがとうございます！」」

そう…まだ少し心ここに在らずって感じだけど、助けてくれたお礼は誠心誠意しなくちゃ。本当に先生がいなかったら、どうなっていたかわからないもの…。

「顔を上げてよ、皆んな。僕は教師として当然のことをしただけだから」

「で、でもでも…！」

「大丈夫、君たちの気持ちはしっかり受け取ったよ。それに…申し訳なく思ってくれてるなら、今日のことは僕たちだけの秘密ってことで手打ちにしようよ」

「？　どうしてですか？」

「僕みたいな『暴力教師』が宮女に勤めてるーーーなんて噂が立つと学校を経営してくれてる色んな人に迷惑がかかっちゃうかもだし…」

「ああ、でも!?四人ともすごくいい子だから、決して信用してないわ

けじゃないからね!?」と焦りながら補足を挟んでくる先生は、とても不良集団を圧倒した人には見えなかった。

どこまでも優しくて…生徒思いなこの先生を、私は彼の言う『暴力教師』だとは認めない。

「…わかりました。私たちを助けてくれたかっこいい先生のことは秘密にしておきます。それでいい？皆んな」

「ええ、もちろんよ。愛莉ちゃんとかっこいい渚先生がそう言うのなら誰にも言わないわ」

「そうだね。誰にだって隠しておきたい秘密の一つや二つはあるものだし」

「私も賛成だよ！」

「ありがとう。すごくありがたいんだけど、…そのかっこいいって認識は僕が恥ずかしくなるからやめようか…？」

「そういえば渚先生はどうしてこんなところに？

私みたく迷子にでもなっちゃったのかしら？」

「ちがうよ!?　しかも、スルー!?」

そこから駅までの帰り道にも付き添ってくれた先生と別れて、改めて思う。…ああ、あんなことがあった後なのにこんなにも笑えてるって。

それもこれも全部渚先生のおかげね。感謝の気持ちを忘れずに、アイドルも勉強も、両方頑張らなくっちゃ！

後日。

「なぎちゃん先生！先生が不良をぼったぼったと薙ぎ倒したっていう噂は本当なんですかー！」
「何故にその噂が!?」
「ごめんなさい。うちのお姉ちゃんが…」
「雫さん!!??」

オマケ；あの時渚がいたワケ。

『渚さん。まもなく目的地の《松来軒　シブヤ支店》です』
「ありがとう。律」

ーーーーーー「は、離して！」

「ん？　この声…」
『どうかしましたか？』
「…律、悪いけどナビは一旦ストップ。ちょっと野暮用ができたみたいだ」
『了解しました。……お気をつけて』
「うん、行ってくるよ」

体育祭の時間・2時間目

体育祭。
それは、日夜学業に勤しむ学生たちがさまざまな競技・種目で勝ち負けを競うスポーツの祭典。チーム一丸となって闘うことを趣旨とするこの行事（イベント）は、競技中どんな時でも大逆転が起こり得る可能性を秘めている。何より…運動の得意不得意に関わらず、友達や同じ組の仲間と全力で楽しみ、絆を深められる得難い機会になるだろう。
加えて、今年の体育祭は過去に行われた競技が復活していたり、学年を超えての交流が求められていたりと、例年と比べ趣向が大きく変化している…らしい。生徒伝に聞いた限りだと。
内容の大幅な変更に伴い、実行委員が総出で動きこれだけ入念に企画を練ってくれたことには是非とも花丸を贈りたい。
…そして、教師である僕はあくまで脇役として、今日一日校庭という舞台で輝く生徒たちを応援するために頑張るつもりだ。勿論、出歯亀が分を超え過ぎないよう注意して。

☆

「な、渚先生！　お願いです、私に借りさせて下さい！」
「望月さん!?」
「カードに書かれてた《借り人》のお題が可愛い先生なんです。それに、バックストレート側（生徒席の近く）にいるの渚先生だけで…」
「ぐっ！　うう……」
ま、まあ…借り人競走（こういう競技）なんだから仕方ない、仕方ない…。

☆

『おおっと、ここで怒涛の追い上げだ！　1年B組の望月選手と潮田

先生がすさまじい速さで他の選手たちを追い抜いていきます！』
「すっ～ごい！　はやいはやい！　穂波ちゃん、なぎちゃん先生、二人ともがんばれ～!!」
「いや、穂波は知ってたけど渚先生も走るの速すぎでしょ…。ずるくない？」
「あはは…」

☆

競技終了後。

「一位ゴールおめでとう、望月さん！」
「はい！　私の方こそ、先生のおかげで勝つことができました。ありがとうございます」
「ううん…全部望月さんの実力あっての一位だもの。もっと自分の頑張りを褒めるべきだよ！」
「そ、そうですね／／」

…あれ？　〝脇役〟　って意味、何だったっけ？

◆◇◆◇◆◇◆◇

一年生の借り人競走が終わってからというもの、潮田先生は今までのテンションが嘘のように塩らしくなっていた。
クラスメイトがその理由を問い質したところ、「望月さんが速すぎ

て調子乗った…。選手じゃないのにこんなに目立つの恥ずかしいって…」と弱々しい答えが返ってきたらしい。いつもしつこいくらい張り切って授業してる人が、今さら何言ってるんだろう。

「さあ！　次は《クラス別対抗リレー》よ。そこでいつまでもいじけてないで私たちと円陣組みましょう、渚先生！」

「僕と肩組むことへの抵抗はないの…？」

「「「全くもって」」」

「即答かよ!?」

次の種目…《クラス別対抗リレー》は学年毎クラス別に分かれて行う体育祭の恒例競技の一つ。だけど、去年と規定が少し変えられ、私たち生徒だけでなくクラスの担任も走者として好きな走順に交えるルールが加わっている。

これも体育祭実行委員が掲げる、『皆んなが笑顔になれる楽しい体育祭を』というスローガンのもとで施された変革の影響らしい。

（皆んなが、笑顔に……なんて叶うわけがない。笑い方のわからない私がいるっていうのに）

クラスで円陣を組みリレーへの意気込みが高まっているなか、私はそれと全く関係のない考えに至り、どれだけもがいても抜け出せないあの悲壮感に人知れず染まっていた。

K…奏が私を救う曲を作り続けると約束した瞬間から、確かにセカイから消えたいという想いはなくなった。けれど、私が『私』を見つけられていない今、心から笑うことなんて…やっぱりできない。

（なんで、こんなに苦しいんだろう）

どうして苦しいのかすらもわからずに、私は胸に縛られるような痛みを孕んだままフィールドに降り立った。
普通トラックを半周しバトンパスするところを、アンカーを務める私は丸々一周走ってゴールする。皆んなよりも多く走って疲れれば、この痛みも紛れるかもしれない。
そんな淡い期待が浮かんだ瞬間、ピストルからスタートの合図が木霊したーーーーーーー。

◆◇◆◇◆◇◆◇

『さあ、一斉にスタートしました！　先程も解説しました通り、今年のクラス別対抗リレーは担任の先生方も交えて行う特別ルールです。一年生に続き、二年生は一体どんなレースを見せてくれるのでしょう！』

始まった…！　おそらくこのリレーが、僕が黄組の優勝に貢献できる最後のチャンスになる。集中しなくちゃ。

……朝比奈さん。うまく隠してるけど、競技が始まる前後で纏ってる空気が全然違う。まっさらの白紙が一瞬で黒一色に染め上げられたような衝撃を感じた。
人当たりのいい人が浮かべるいかにもそれらしい笑顔の裏で、彼女は何かに苦しんでいる。……すごく気がかりだ。

『これはすごい！　D組の桃井選手が脅威の追い上げを見せ、一気に最下位から二位へと食い下がりました！』

っ。正直煮え切らないけど、まだ朝比奈さんの事情に深く踏み込む

のはよそう。
今はリレーの真っ最中で、僕の走順は最後から二走目。つまり、アンカーである朝比奈さんにバトンを繋がなくてはならないから。
気持ちをしっかり切り替えて、これから自分がなすべきことに全力を出そう。

ーーーーと、僕にバトンを渡してくれる子を待ち構えていたその時。

「きゃあ！」
「！　石井さん！」

テイクオーバーゾーンまであと少しというところで、先頭を走っていた石井さんが躓き転倒してしまった。すると、そこそこの差がついていた他クラスの子たちに次々と追い抜かれ、僕たちB組はあっという間に最下位まで落ちてしまう。

「えうっ…ひっ、く」

それでも彼女は立ち上がった。悔しさで涙が溢れ、嗚咽を漏らしながらも決して諦めずに。
…こういうとき下手な慰めや労いの言葉なんてかけられない。それは彼女の頑張りを貶すことになる。
だから、極めて短くシンプルに、今の彼女を勇気づけられる言葉を送ろう。

「勝つよ、絶対に」
「…え？」

ーーーーだから、待っていて。バトンを受け取った瞬間、言葉に表

しきれなかった言葉は目と目を通して訴えかけた。
つい先日の休みを、全速力で走る感覚を取り戻すために費やしておいて良かった。
かなり大人げないかもしれないが、久しく本気で勝ちを狙いにいきたくなった僕は、誰にも止められない勢いで校庭を駆け抜ける。

目指すは一位（てっぺん）…！

『なっ、なんということでしょう!? 最下位だった2年B組の担任、潮田先生が徐々に巻き返してきました！ 先頭集団に必死に食らいついています！』
「先生すごい…。もう二位まで上がりそうだよ！」
「頑張れ！ 渚先生！」

くっ…だけど、僕に残された距離じゃ一位の選手はもう抜かせない。なんとか二位まで這い上がってこれた。それなら、後はーーーー

「朝比奈さん！」
「…！」
「任せたよ！」
「はい！」

朝比奈さんに全てを託す！

◆◇◆◇◆◇◆◇

潮田先生が強く押し出すバトンは私のスタートに勢いを授けてくれるように、綺麗に繋がった。
それに、アクシデントに見舞われながらもこうして私の元まで辿り着いたバトンを握りしめると、胸の奥が熱くなる。始めは、どの競技でもただ『優等生（良い子）』を演じるだけでいい…勝敗なんてどうでもいいと

思ってた。
…だけど、なんでだろう。負けたくない。クラスメイトの皆んなと先生の走りを見届けた今、そんな気持ちが生まれていた。

（あれ…。　胸がとても熱いのに、全然苦しくない…？）

第一コーナーに差し掛かる時には苦しくて嫌な感じのするあの鈍い痛みは消えていた。おかげで自分の状態（コンディション）がすこぶる万全だと断言できる。
そして、一位との距離を縮めるごとに身体はむしろ活発に、速く動くようになってゆく。本来蓄積される疲労はどこへ行ったのかと疑問に思うほど、今の私は兎に角速かった。

『距離は残り１００ｍ、Ａ組とＢ組が接戦を繰り広げています。一体どちらが先にゴールするのでしょうか！』

実況のアナウンスが聞こえたのか、前にいるＡ組のアンカーの走りが変わった。私から逃げ切るために脚の回転がさらに速くなる。
私だってまだまだギアを上げられる。膂力も残ってる。だから、彼女を必ず追い抜くと決めた。

ーーーーーーーー《　任せたよ！　》

（勝ち、たいっ…！）

何より、私の心は勝利を渇望していた。理屈なんてわからないけど……その気持ちが一番の動力源となって、私を突き動かす。

『トップは残り３０ｍ！』

（もっと、もっと…！）

ここでＡ組と並ぶが、まだ向こうの方が若干速い。声援の騒がしさを忘れ、一心不乱に腕を振る。視界には、ゴールテープと追い越せそうで追い越せないＡ組のアンカーしか映らなかった。

そしてーーーーー

パンッ！

『……一位は、２年Ｂ組！
アンカーの朝比奈選手、Ａ組と僅差でしたが、勝利しました！』

◆◇◆◇◆◇◆◇

朝比奈さんがゴールした瞬間、客席がどっと湧き上がった。あの見事なまでの逆転劇に、多くの生徒の心が鷲掴みにされたようだ。
空気が震えるような歓声が飛び交うなか、朝比奈さんの元へ駆け寄るＢ組の皆んなは思い思いの賞賛を彼女に送っている。

「まふゆ、すごいよ！　最後のあの粘りホントドキドキしちゃった！」
「最っ高にカッコいい勝ち方だったね！」
「あはは…そうかな？」

すっかりクラスメイトの注目の的となった朝比奈さんは、周囲の圧が強すぎるあまり困惑気味だ。僕も彼女と話したいんだけど、これじゃちょっと難しいかな。

「あ、渚せんせーもおっつー！　せんせーもめちゃくちゃ速くて、マジびっくりしたわ」
「ね～、いつもの小動物っぷりが嘘みたいに目ギラギラさせてたし」

うう、好き放題言ってくれる…。

「ありがとうございました、潮田先生。先生の走りもとても素晴らしかったです」
「うん、お疲れ様。朝比奈さんにそう言ってもらえるなら、僕も頑張った甲斐があるよ」

…て、手強い。波長が微かに揺らいでいたからもしかしたらと思ったけど、やっぱり彼女が〝本当〟の笑顔を取り戻す道のりはまだまだ長そうだ…。一応、初めて会った時よりかは良い意味で変われてるってことで、喜んでいいのかも。

そしてそれからはと言うと、石井さんが怪我をしていないか確認を取ったところで僕の役目は完全になくなり、体育祭が終わるまで大人しく本来の応援役（定位置）に腰を据えていた。
けれど、当分鳴りを潜めていた『殺（や）る気』に目覚め、生徒と同じ目線で競技を全力で楽しめたのは純粋に嬉しかった。

朝比奈さんに関しては、もう少しだけ…今後の彼女の動向を見守ろうと思う。僕の考えている以上に複雑に、そして何重にも絡みついている朝比奈さんの鎖を無理に壊そうとすれば、朝比奈さん自身が潰れかねない。
焦ったいけど、朝比奈さんの細かな変化に気を配りつつ慎重に近づいていきたい。『本当』の朝比奈まふゆを殺してしまったものの正体に。

デートの時間

「え？　今度の日曜空いてるかって？　どうしたの急に？」
『うん、僕たち最近ずっと会えてないからさ。久しぶりに茅野と一緒に何処か遊びにいきたいなって思って』
「ああ、デートのお誘いね。渚からしてくれるなんてちょっと意外～」
『デッ…!?　別にそんな邪な感情があるわけじゃ…』
「はいはい。純然たる善意なのはわかってるし、冗談だからそんなに慌てないの。先生ならもっと毅然としてなくちゃ」
『プライベートにまで先生らしい立ち居振る舞いを求めないでよ…』

よかった、渚すごく元気そう。勤務先の学校が変わったって聞いた時は環境の変化に伴うストレスでやられないか心配だったけど、無問題みたい。
最近はお互い忙しくて全然連絡取れなかったもんなあ。渚の声聞くだけでも懐かしいや。

「今勤めてるの女子校なんでしょ？　渚が女子高生たちにおもちゃにされてないか心配でさ」
『――――』
「あれ？　もしかしてもう…」
『すっかりいじられ放題です…』
「あー、案の定」
『案の定!?』

元の容姿が短髪の今でもアレなのに加えて、寛容で面倒見の良い『先生』の渚が女子高生にウケない訳がないんだよね。しかも、E組きっての年下キラーだし…無自覚に誰かをオトしてる可能性すらある。天然たらしって本当に怖い。
あ、今のでまた落ち込んでる。

「ごめんって渚。デートの話したいし、切り替えてこ！」
『もう、わかったよ』

次の日曜がオフであることを伝えると渚は機嫌を直してくれた。それから当日をどのように回りたいか、そこにはどんな面白さがあるかとか想像力を膨らませるようにわかりやすく話してくれたから、私も聞いていて楽しかった。

大好きな人と久しぶりにゆっくり話せた上に、渚は頑なに否定し続けたけど　デートの約束までできちゃって……まだ胸がドキドキしてるよ。

「フェニックスワンダーランドかあ。そういえば遊園地デートは案外初めてかも」

渚に意識してもらえるようにとびっきりオシャレしてこう。本気で狙いにいかないと、あの目標（ターゲット）の心はきっと動かせないはずだから。

◆◇◆◇◆◇◆◇

一週間後。

「うーん…早く来すぎたかな」

待ちに待った茅野と遊園地で遊ぶ約束の日。大事な友達との再会が楽しみだからって、少し張り切りすぎたかな…。待ち合わせの時間にはまだかなり余裕がある。

茅野に「このことは他言無用ね。特に、渚の生徒たちには！」と釘を刺された通り、今日の予定に関しては誰にも口外していない。やっぱりお忍びで外出してるから、彼女としては極楽高に居た時みたいに生徒（誰か）に注目されるのは避けたいんだろう。

「なーぎさ！」
「あっ！　茅野、久しぶ――…」

それから待っていることほんの数分。明るく懐かしい響きのする声が背後からかけられ、僕は意気揚々と振り返る。けれど、いつものようにフランクに喋りかけたところで、思わず言葉を失ってしまった。

「えと、どうかな？　似合ってる？」

茅野は少し恥ずかしそうに訊ねる。
ブラウス、ニーハイ、ブーツが全て黒で揃えられているからか、首にかかるネックレスと真っ赤なミニ丈のフレアスカートがよく映える。簡素ながらも、着ている人の魅力がしっかりと伝わってくるとても可愛らしいコーデだと思う。
けれど、僕が何より衝撃を受けたのは彼女の髪だった。

「それとこれ、ちょうど今の髪質と長さに合ってるウィッグなんだ。変装も兼ねて、昔の頃と同じ色と結び方にしてみたの」

緑色でツーサイドアップの髪型…少し伸びているけれど、E組でともに過ごした〝茅野　カエデ〟がそこにはいた。

「また染め直したかと思って驚いたよ…。でも、やっぱり茅野のその髪すごく似合うなあ。今の下ろしてる方も素敵だけど」
「すっ、素敵!?」
「うん。今着てるシックで可愛い服も魅力的だよ」
「～～～／／／／」
「？　茅野、顔赤くない？　もしかして熱でもあるんじゃ…」
「ないないないから!?　だから、これ以上純粋な眼差しで私を見つめ

ないで！」
「ええ？」

そう言うと茅野は慌てて僕に背を向けてしまう。感じたままの言葉を伝えただけなのに、そこまで動揺されると正直少し凹むなあ…。
あれ以来彼女にいつ拒絶されてもおかしくないとは思ってるけど、それが何の前触れもなく唐突に起きればおそらく僕は精神的にも社会的にも死ぬ自信がある。冗談ではなく本当に…。

「ありがとね渚。その…す、素敵って言ってくれて」
「本当に？　急に動揺してたから、てっきり怒ってるんじゃないかと思ったんだけど…」
「まさか！　ちょっと恥ずかしくなっちゃっただけだよ。大袈裟だな～」
「あはは、そっか。なら良かった」

一瞬最悪の懸念が過ったけど、茅野はむしろ喜んでくれていたので思わず胸を撫で下ろす。すっかり笑顔だし、これ以上彼女の心配をするのは野暮だろう。
お互い誤解も解けてスッキリしたところで、僕たちはいよいよ本来の目的地であるフェニランへ向かうことに。今日のために人気のアトラクションだけじゃなくて開催予定のショーやイベントまでたくさん予習しておいたから、茅野が心ゆくまで楽しんでくれたら嬉しいな。

☆

フェニックスワンダーランド。

「♪～～～」
「上機嫌だな、小豆沢。それほどショーが楽しみなのか？」

「もちろん！　それに青柳くんこそ司さんの演技が見たくてたまらない、って顔に書いてあるよ」
「むっ。そ、そうか」

えへへ、かく言う私もショーの開演が待ち遠しくてたまらないよ。隣を歩く青柳くんは座長の司さんが目当てな感じだけど、私…小豆沢こはねと同じくワンダーランズ×ショウタイムの大ファンであることには間違いないから、ショーが始まる前のワクワクする気持ちはすごくよくわかるなあ。

「二人とも早歩きになってるよ！　ちょっと待って！」
「…ったく、子供じゃねえんだからそこまで急ぐことないだろ」

もちろん練習もイベントもない完全オフである今日、フェニランへは《Ｖｉｖｉｄ　ＢＡＤ　ＳＱＵＡＤ》の皆んなで遊びに来ている。
私たちの後ろで杏ちゃんと東雲くんが駆け足になりながら声をかけてくれるけど、甘い…！　甘いよ二人とも！

「彰人、ワンダーライズ×ショウタイムは今やフェニランの宣伝大使…。そのおかげで観客数の伸びも凄まじく、最近は早めに座席を確保しておかなければ公演を間近で見ることができないんだ」
「そう！　老若男女を問わず大人気だから、皆んなで揃ってショーを見るためには早く行かなきゃなんだよ、杏ちゃん」
「おー、こはねすっごい気合い入ってる。…でも、なるほどね。二人が張り切ってたのはそういうわけか」
「ああ、そこまで言われたらしゃあねえな。とことん付き合ってやるよ」
「彰人は素直じゃないな～」
「るっせ」
「ふふふ。……あれ？」

私たちの前に誰かいる。ワンダーステージへアクセスするための長い道を歩く二人組だ。話すのに夢中で全然気付かなかったな。
というか…うち一人の後ろ姿、どこかで見たことあるような？
「なあ、あの背丈と髪色、もしかして渚さんじゃないか？」
「え、…あ！　言われてみれば確かに」
「ホントだ。じゃあ隣にいる女の人、渚さんの彼女なのかな？　後ろ姿だけでもすっごい美人！」
「いや、そうとは限らねえだろ…。本人に確認しないで勝手に盛り上がんな」
あはは…。それでも杏ちゃんの言う通り、私も渚先生とその隣の女性がすごいお似合いのカップルだと思う。あのお互いの距離の近さ、どう考えてもお付き合いしてるようにしか見えないしね。
「後ろの方賑やかだね。私たち以外にもこんな早いうちから来るお客さんいるんだ」
「この時間帯は空いてるってアドバイスもらったんだけどな…。それにこの声どことなく聴き覚えが――――って、小豆沢さん？」
「「「あっ」」」
「それに白石さん、東雲くん、青柳くんまで！　そっか、ビビバスの皆んなもフェニランに遊びに来てたんだ」
「は、はい！　こんにちは、渚先生」
「ご無沙汰してます」
「こんにちは」と、渚先生も笑顔を添えて丁寧に挨拶を返してくれる。するとそんな私たちのやり取りを見て不思議に感じたのか、先生と一緒にいた女の人が横で首をかしげている。

「渚、この子たちと知り合いなの？」

わあ…！　近くで見ると本当に綺麗。肌のキメも細かいし、まつ毛も長い…。

私とそう身長が変わらなさそうなのに、纏ってる雰囲気が完全に大人の人のそれと一緒だ。

「うん。行きつけのカフェで勉強を教えてあげたり、歌を聴かせてもらったりする間柄かな。…言葉で表すとちょっと不思議な縁かもしれないけど」

「へえ、そうなんだ」

「？　渚さんが勉強を教えてるのは基本彰人と白石だけですよね」

「ちょっ…!?　冬弥／ァ！」

青柳くん、今そのフォローを挟むのは蛇足な気がするよ…。

☆

「茅野　カエデだよ。気軽に　〝カエデ〟　って呼んでくれたら嬉しいな」

「はい！　よろしくお願いしますね、カエデさん」

あれから茅野と小豆沢さんたちがお互いの自己紹介に移ったけど、どうやら茅野が『磨瀬　榛名』だとは気付かれていないようだ。間近で話すと正体バレしてしまう可能性があったから、思わずほっとする。

「それにしても驚いちゃった。まさか渚が勤めてる学校の生徒さんがこはねちゃんだけだなんて」

「あ、言われてみれば…」

「気にしたことなかったんだ…。ふふ、他校の生徒でも甲斐甲斐しく勉強を教えちゃうあたり、やっぱり渚だね」

僕たちの関係性を知った茅野からある意味当然とも言える指摘を受ける。確かに普通なら、プライベートの時間を削ってまで他校の生徒に教育を施しはしないだろう。…でも、

「そう、だね……勉強がわからない子や苦手な子の力になりたいと思うのに、その子がどの学校に所属してるかなんて些細な問題だから深く考えたことは一度もないよ。

世間だと労力の無駄遣いなんて言葉で吐き捨てられるかもしれないけど、少しでも苦手なことに向き合ってもらえるようになるのなら…僕が〝先生〟として費やしてきた時間と努力は決して無駄なんかじゃないと思うんだ」

「「「「……」」」」

え？　何、この静かすぎる間。

「今の聞いたでしょ、みんな。この通り渚は生粋の《教育バカ》だから、息抜きのために勉強を中断したいと思ったら遠慮なく『止めたい』って言っていいからね！」

「「「「はーい」」」」

「いや、素直!?」

自分から語り出したこととはいえ、まさかの《教育バカ》扱い…。嬉しいのになんでだろう…文脈的に純粋な褒め言葉として受け取りづらいから腑に落ちないというか、締まらないなあ…。

茅野はすっかり小豆沢さんたちと打ち解けたようで、すでに僕そっちのけでワンダーステージの魅力について説かれている。
一連の流れでショーを一緒に見ようという運びにもなったし、これから始まるワンダーランズ×ショウタイムの公演がますます楽しみだ。

「ええ!? あんなにお互いのこと信頼し合ってる感じなのに、まだ恋人じゃないんですか!?」
「あ、杏ちゃん…」
「うううう…／／／／」

デートの時間・2時間目

ワンダーステージ。

『くっ…どうしてあなたが立ちはだかるのです！　ルーイ騎士団長！』

『〝どうして〟　なんて、そんなもの決まっているだろう？　……この私こそが君たちワンダー王国が宿敵、《黒　龍》に他ならないのだからね』

『なっ、何いィ!?』

『ククク、実に愉快な反応だ。どうしても信じられないというのなら見ているがいい、私の真の姿を！』

ゴゴゴゴ…

――なるほど、確かにこれはすごい。

偶然居合わせたビビバスのみんなとワンダーステージのショーを観覧してるけど、物語の世界観にぐっと引き込まれていくみたいだ。自他共に認めるフェニランマスターこと小豆沢さんが強く薦めるだけあって、初心者の僕でもこのショーの完成度がいかに高いのかがよくわかる。

この物語の主人公はとある王国に忠誠を誓う新米騎士（名を『ツカーサ』という）で、彼を中心として話は進行していく。

魔法やモンスターの存在するファンタジーな世界観がモチーフだからか、ヒロインのネネルナ姫は歌うことで癒しの魔法を発動させるし、ツカーサの相棒である女騎士エムルー（もとい宮女1年B組の鳳さん）は観客（国の民）の応援パワーを剣に乗せてモンスターを懲らしめる。特に後者は小さな子どもたちが大いに盛り上がっていた。

そのストーリーの構成も実に秀逸だ。
序盤にてツカーサが『みんなが笑顔で平和に暮らせる国を作るんだ！』という夢をはっきりと誇示することで、彼が騎士団長ルーイに憧れるまでの心情の移り変わりに共感が持てる。ちょっぴり臆病なエムルー、お転婆なネネルナ姫と織りなす日々のドタバタ劇を通して主人公が徐々に成長していくのもおもしろい。
途中『団長（ルーイ）に指南を受ける新米（ツカーサ）』という至って普通そうな場面があったけれど、思い返してみればその時のルーイの会話の端々には自身の本性や正体を仄めかすような言い回しが紛れていたから、全てはこの裏切（これ）りに繋がっていたのだと納得もできる。
起から承にかけて度々発生した魔物との戦闘は、ロボットを用いてリアルさを極限まで追求した演出により、臨場感や迫力がとにかくすごかった。

そういう理由（わけ）で、物語が山場を迎えようとしている頃には…演出はもちろん、歌声や演技、繊細な所作といったショーのあらゆる要素の精巧さに僕はすっかり魅了されていた。

『な、なんという気迫だ。目の前に立っているだけでも押しつぶされそうになる…！』
『私が恐ろしいか…そうだろう。　だが、それは私も同じ。　これまで数多くの魔物たちを打ち倒してきた貴様の実力と勇気こそ、私にとってはもっとも恐ろしいものなのだよ』
『ならば、この魔物の軍勢による襲撃もお前の策略のうちであると？』
『いかにも。　全ては騎士ツカーサ諸共王国の騎士団を滅ぼすためにしたこと』
『！　…っ許しておけん！　例え俺が強く憧れたお人であっても、このような蛮行に走る姿をみすみす放ってなるものか！』
『ほう？　私を許さずして、どうする？』
『馬小屋に入って、反省してもらおう！』

冒頭のシーンにどういう意味があったのか、これで理解できたよね？

ルーイが一瞬で神々しい装備から全身真っ黒でおどろおどろしい衣装に変わってみせると同時に、舞台裏から彼と同じ意匠が施された龍が現れる。胴体は西洋、頭は東洋のドラゴン／龍に近い特徴を持っていてかなり独創的だ。首や尻尾や翼がゆらゆら動いていて、まるで本当に生きているように見える。

「（それに馬小屋で反省って、たしか騎士団の懲罰システムの一つだったはず…）」

ここまで彼の人となりを見ていれば、ある程度想像がつく。ツカーサは例え相手が敵であっても手を差し伸べようとしているのだろう。十歳から十代半ばの男の子が見れば胸が熱くなりそうな展開だ。

『やれるものならやってみるがいい。　…我が忠実なるしもべ《闇刻衆》よ、ツカーサを倒してしまえ！』

『『『ギョイ～』』』

あ、そんないかついネーミングしてたんだ、この魔物たち。雰囲気は黒龍そっくりだけど、普通の動物がデフォルメされたような姿だったから意外に設定がちゃんとしててびっくりした。

しかし、《アンコクシュウ》…狭間さんや不破さんあたりが好みそうな響きをしてるから、イメージ付与にはあまりにもピッタリすぎる。

『来い！　どんな者が相手でも俺は負けない！』

程なくして激突するツカーサと闇刻衆。自立稼働型のロボットと本気で相手取っているがゆえか、やはり緊迫した空気がひしひしと伝わってくる。なかでもツカーサの剣戟は鋭く、しなやかで美しい。

その『魅せる戦い方』に夢中の僕は、彼が今まで積み上げてきたであろう途方もない努力の片鱗を垣間見た気がした。

ガコンッ！

「（っ！）」

白熱した戦いの真っ只中、おもちゃのネジが外れるような…嫌な音が聞こえた。

どう考えてもヤバい気しかしない。そう思った僕の直感は寸分違わず的中することになる。

「（ステージを降りた…!?）」

どういう作りをしているのか、突然動きを変えたロボットは結構な高さのあるステージから降りてもびくともせずに稼働し続けている。

……客席に向かって。

暴走（？）しているのは敵役に宛がわれたうちの一体だけとはいえ、バイク大の機械が客席の先頭列に座る幼児（こども）たちに衝突すれば間違いなく大事故になってしまう…。

幸いなのは、子どもとロボットの間に僕が止めに入れるだけの距離がまだ十分にあることだ。…止めようがなければ、最悪身を呈して守ればいい。

ショーを中断させる覚悟も決めて、身を乗り出したまさにその時―

―

「(渚)」
「(…！　茅野？)」
「(私に任せて)」

口元に指を当て悪戯っ子のようなウィンクを決める茅野は、逆に僕が止める間も無く飛び出した。
さながらピンチに駆けつけるヒーロー…否、ヒロインのような華麗な身のこなしで客席から舞い降りた彼女は――――
「てりゃあぁ！」

岡野さん直伝のドロップキックをロボットに叩き込み、子どもたちを危機から救う。
機械仕掛けの動物が地面に倒れると、一瞬耳の痛くなるような静寂がステージ全体を支配した。けれど、

『何をボッーとしているの、騎士ツカーサ！　一刻も早く闇刻衆を打ち払いなさい！　それとも私たちワンダー王国騎士団の務めを忘れてしまったの？』

ショーの熱を決して冷まさせはしないと言わんばかりに、茅野は叫ぶ。

…ああ、そうだ。彼女にとって演じるっていうのは日常茶飯事のことなんだった。ハプニングをハプニングと思わせぬ自然な言い回し(セリフ)と振る舞い(格闘術)を目にして思い出す。
圧倒的演技力を誇る大女優が乱入したショーステージ。その行く末がどうなるのか…不安な感情よりもむしろ興奮が勝り、子どもみた

いにワクワクしている僕がいた。

◆◇◆◇◆◇◆◇

「な、なんだなんだ？」
「これもショーの演出なのか？」

オーディエンスが静かに騒めく。プロレス技を以て類のロボットを止めてくれた華奢な女性の登場に、舞台上のキャストを含めワンダーステージの全員が釘付けになる。無論、この俺も。

しかも彼女は続けて、これもあくまでショーの演出の一環であると周囲に知らしめるように完璧な芝居を披露する。俺に向けて投げ掛けられる言葉は、まるで騎士団の仲間が鼓舞してくれるように錯覚した。注目を掻っ攫われたが全く嫌な気持ちはせず、むしろ奥底からやる気が満ち満ちてくるようだ。

「（っ！）」
『貴方に勇気が足りないというのなら、この女騎士メイプルが助太刀するわ！　…だから、決して諦めないで』

視線がかち合い、彼女の瞳から伝わってきたのは、『ショーを絶対に成功させたい』という…俺たちワンダーランズ×ショウタイムと全く同じ意志だった。ううむ、初対面のはずなのにここまで気持ちが通じ合えるのは奇跡としか言いようがないな。

しかし……ふっふっふ、名も知らぬ女性だが、騎士としての俺（ツカーサ）と役者としての俺（天馬司）の両方の背中を後押しする言葉を賜っていただいた上、こんなにもお膳立てをしてくれたのだ。こちらも相応の《御礼》を返さなくては無作法というもの！

『言われずともわかっているさ！　ツカーサの辞書に　〝諦める〟という文字はなあぁい!!』

「(司くん？)」
「(やりきるしかないだろう！　俺たちのミスを最高の演技で繋いでくれたお客さんのためにも！)」
「(それは……ふふ、確かにそうだね。僕も挽回するつもりで精いっぱい暴れさせてもらうよ)」
「(うむ！　気合いが十分なのはいいことだが、くれぐれもステージは壊してくれるなよ！)」

となれば、メイプル？ともこっそり段取りを取らねばならんな…。必要な時は彼女にもステージに上がってもらおう。
この少々突飛な大舞台、必ずや成功させてみせる！

☆

『勇猛果敢なメイプルに相応しい武器を授けるぞ！　聖剣エクスカリバーだ！』
『いやこれどう見てもなまくら刀――』
『エクスカリバーだ!!』
『……』

『――、――――♪』
『ぐおおおっ……これ、は！』
『おお！　ネネルナ姫と王国に住まう観客(みんな)の祈りが込められた歌で、黒龍の　〝悪いこころ〟　がみるみる浄化されてゆくぞ！』
『『みんなー！　もっともっとネネルナ姫を応援して～！』』
「「「「がんばれー、おひめさま！」」」」

『――こうしてルーイが　〝優しいこころ〟　を思い出すと暴れん坊の魔物たちもすっかり大人しくなり、ツカーサが大好きだった王国

は再びたくさんの笑顔で溢れ、長く平和な世が続いたのでした』
『めでたしめでたし！』

パチパチパチパチ！

「ふう、なんとか丸く収まったみたいだね。…おや？　アンコクロボがまだ動いて――」
『ギギギ……』

ボカァァン！

「きゃあああっ！」
「か、茅野ぉーーー!!」
「爆発オチなんてサイテー！」

おわり。

◆◇◆◇◆◇◆◇

「誠に申し訳ありませんでした！」

ショーが閉幕しワンダーステージから観客が出払っても、僕たちはまだ客席に留まっていた。それというのもキャストさんと茅野がお互いに話がしたいと意見が合致したからしいが、開口一番にクソデカボイスの謝罪が飛び出てきたせいで茅野は目をパチクリさせて驚いている。

「気にしないで。私もあなたたちのショーをめちゃくちゃにしちゃったし…本当に、色々とごめんなさい」
「めちゃくちゃになった原因は類のロボットのせい…。だから大丈夫、です…」

「寧々、確かに悪いのは僕だ。反省するよ。
…でも、一つだけ弁解させてくれないかい？　僕はアンコクロボに自爆機能なんて搭載していない。だから、あの最後の爆発は僕にとっても不可解なんだ」
「また出鱈目を…」
「いや、類は嘘を言っていない。俺だってあのロボに爆破する機能があるなんて知らなかったからな。少しでも危険な可能性があるのにそれを伝え忘れるなんて杜撰な真似は、類は絶対にしない」
「う～ん、司先輩がそこまで言うなら……でも、だとしたらどうして？」

ワンダショもビビバスのみんなも難しい顔を浮かべる。製作者本人である神代くんは、さんざん悩み抜いた上である結論に辿り着いた。

「……少し言い訳がましいけれど、カエデさんのキックの当たりどころが悪かったのかもしれませんね」
「え。あの時頭を思いっきり蹴ったけど、まさかアレで？」
「そう、アレで。ロボの頭部には回路が集中していましたし、そのうちの何本かが蹴られた衝撃で切断していてもおかしくはありません。その結果、締めの場面でついにバグを起こし爆発した…と考えるのが妥当かと」
「――――」

「……ゴリラ」

「誰だ今　〝ゴリラ〟　っつったの!!??」

消え入りそうな呟きが聞こえ、今を時めく女優がしちゃいけないような表情で茅野は荒ぶる。ああ、ファンの人がこんな顔を見たら卒倒

不可避だよ…。

「ちょっ、落ち着きなよ茅野…」
「はあ!? これが落ち着いていられると思うわけ!?」
「滅相もございませんっ!!」

「ふふ、見かけによらず案外茶目っ気のある人なんですね。〝磨瀬 榛名〟さん」
「!」

今、なんて…?

「む、どうした類。熱でもあるんじゃないか?」
「ん…いきなりカエデさんを某有名女優の名前で呼ぶのは失礼だよ…。確かに雰囲気は似てるかもしれないけど」
「? このお姉さん、榛名さんなんじゃないの?」
「「「「え?」」」」
「あり?」
「えむちゃん、それ本当?」
「うん! 初めて見た時からなんとなーくそんな気がしてたんだ!」

神代くんは持ち前の観察眼で見抜いたとして、鳳さんは完全なフィーリングで茅野の正体に気づいてたってことか。……まずい。これ、誤魔化しきれるかな。

「ま、まさか…きっと他人の空似だよ。ほら、磨瀬 榛名とは髪色が全然違――」
「よくわかったね。そ! 正真正銘、私が本物の〝磨瀬 榛名〟さんだよー」
「茅野!?」
「え、マジ…」

「ほほう。それはそれは…」

と、茅野の突然のカミングアウトに高校生組一同は三者三様の反応を示している。鳳さんはさらに目をキラキラさせ、白石さんと東雲くんに至っては唖然としたまま動かない。神代くんはなぜか余裕の表情だ。

それ以外の子たちも大小差はあれど驚きを露わにしてるしで、状況は軽くカオスと化す。

「なんで正体バラしちゃったの!?」

「このままはぐらかしてもみんな納得しなさそうだし、仕方なく？…それに、即席とはいえ同じ舞台に立った仲間をずっと騙してるのは違うんじゃないかなって思ったからさ」

「…！」

「もちろん、このことを誰かに言ったら『滅ッ！』だからね♪」と、みんなを優しく諭す茅野を見てなんとなく察しがついた。

きっと小豆沢さんや司くんらとの距離がぐっと近くなったからこそ、自分の心に正直でいたいんだろう。であれば…これ以上僕が余計な口を挟むべきじゃあないかな。

「それにしても、ウィッグまで着けて変装してたのにバレるとはね～。類くんはどうして磨瀬（わたし）榛名だってわかったのかな？」

「一緒にショーを演じたらすぐに気づけましたよ。榛名さ――いえ、カエデさんの動きのクセは磨瀬　榛名のそれとほとんど同じでしたから。…あとは、その透き通るような声域で確信を得られた、という感じでしょうか」

「ふうん…。そこまで豪語するだけあって、私のお芝居かなり研究してくれてるみたいだね」

「当然だ！　名演技を幾度となく連発してきたあなたの芝居を、ショーの参考にしない手はない！」

「…司、その割に全然見抜けてなかったじゃん」
「それはそれ、これはこれだ！」

あはは…彼、ショーが終わってもずっと元気だなぁ。咲希さんのお兄さんっていうのも納得がいく。
あんなに動き回ってたのに疲れを一切感じさせないその様子からわかる通り、彼も大概努力家だ。いやほんと、天馬家の遺伝子どうなってんだろ…。

「カエデさん！　今日はカエデさんといっしょにとっ～てもわんだほいなショーができて、あたしすっごくうれしかったです！」
「うん。こちらこそ貴重な経験ができて楽しかったよ。また暇ができたら、絶対ワンダーステージに遊びに来るからね♪」
「はーい！」
「またいつでもいらしてくださいね」

ワンダショのみんなとそう約束を交わすと、茅野の真っ直ぐな眼差しが今度は僕に向けられる。

「渚。私、最後にどうしても乗りたいアトラクションがあるんだけど…一緒に乗ってくれる？」
「？　もちろんいいよ。折角の茅野のリクエストだもの」
「やった！　それじゃあ決まりね。
…ってことで、ちょっと名残惜しいけど、みんなとはそろそろお別れかな」
「ええ～、カエデさんと渚さんのことでもっともっと尋m――聞きたい話いっぱいあったのにぃ…」
「おい、名女優の生演技見れただけでも十分すぎるだろ。これ以上二人のプライベートに首突っ込もうとすんな」

うん……今ちょっと不穏な言葉が聞こえてきたけど、流石に気のせ

いだよね？　これから各々片付けを行ったり、帰路に向かったりするらしいしで、ひとまずは追求されずに済みそうだけど後が怖すぎる。
遊園地に来て楽しい思い出を作れたのに、こんな形で不安の種が残るなんて嫌だよ、僕…。

「みんな、今日は本当にありがとね！」
「小豆沢さんと鳳さんはまた学校で。司くんたちもあんまり遅くならないように帰るんだよ。それじゃ」
「はい！　さようなら」
「バイバーイ、なぎちゃん先生！」

どうか僕たちのことは記憶の隅に追いやって、忘れていて欲しい…。今はそう切実に願うばかりだ。

「あの二人さあ……アレで付き合ってないなんて、絶対ウソだと思わない？」
「「「「「それは言えてる」」」」」
「ほえ？」

◆◇◆◇◆◇◆◇

フェニックスワンダーランド　観覧車。

空はすっかり茜色に染まって、窓から見える小さな街並みの中には

ぽつぽつと営みの光が灯り始めている。
幻想的で儚く…けれどとても美しいその景色を、私の向かい側に座る想い人はどこか寂しそうな表情で眺めてる。愁いを纏い夕陽の光を浴びる彼の姿は、私の目には一層輝いて見えた。
…顔がほんのり熱い。きっと私の頬は、今朝方渚に褒められた時のように赤らんでいるんだろう。

「終わってほしくないなぁ…」
「え？」
「茅野と一緒に笑ったり、驚いたり、ドキドキしたり……こんなに楽しかった一日がもうすぐ終わるって思うとすごく切なくなっちゃって」
「！　／／／／」

渚が名残惜しそうに吐露した言葉に、またしても体温が上がってしまう。こんなとろけきった顔を見られたくなくて咄嗟に俯いたけど、別に渚は私を誑かすつもりで言ったんじゃない。本当はわかってる…わかってるはずなのに――――

「（意識しないで耐え切れるわけないじゃん!?／／／／）」

私の心はめちゃくちゃ揺さぶられていた。内心動揺しまくりの私の胸中を知ってか知らずか、渚はさらに畳み掛ける。

「それだけ今日のショーに心を動かされたんだ。茅野が舞台に上がった時の衝撃とか興奮、見ている人をショーの世界へ誘うような迫真の演技が今でも胸に響いてる…」
「っ」

渚がここまで余韻に浸っている理由を聞いて、嬉しい想いと…僅かな悔しさが芽生えた。私の自慢の刃はターゲットに敵わなかったんだって…。

あの時子どもたちを守りたいと思ったのは紛れもない本心だ。こんなにも素敵なショーが途中で終わってほしくないと望んだことも。
けれど、それをきっかけに、私は台本にない舞台を作り上げた。渚に私の魅力をもっと感じて欲しいがあまり…。
幸いにも観客みんなが即興の演技を受け入れてくれたからよかったものの、一つ間違えていれば批判の矛先がワンダーランズ×ショウタイムに向いていてもおかしくはなかった。
――だから、

「(こんな最低な私のする演技じゃ渚のハートを射止めるなんて以ての外、か…)」

進展が見られないどころか、一気に振り出しに戻った気分…。綺麗な空の色に反して、湿っぽいブルーに染まりかけた時――

「茅野」
「ひゃいっ!」

「これまでは教師の仕事が忙しいからってちゃんと向き合う機会を作ってこなかったけど、今度はちゃんとした舞台で茅野の演技が見たくなったよ。主演を務めて、全力のパフォーマンスを魅せてくれる茅野の姿を」
「ふえっ／／」

――ああ、もう本当に…

「好き。大好き」

「ん？　何か言った？」
「うんん、何でもない！
……ねえ渚。私が女優業に懸ける想いは本物だよ。ちゃんと近くで見るなら覚悟しといてね。ナメてかかると思わず腰抜かしちゃうかも」
「！　ふふ、楽しみにしてるよ」

もう少しだけ、この気持ちは大事にとっておこう。なんだかんだ言って私も、渚とのこの絶妙な距離感が好きだから。
今はただ…ターゲットの寝首を掻く最高のチャンスが訪れる瞬間を、貪欲に、粘り強く狙っていく。
私だって一端の暗殺者（アサシン）だもん。たった一度の失敗ごときじゃ、絶対に諦めないよ。

ストリートの時間

「彰人〜。ちょっと降りてきてくれる？」
「おーう」

次のイベントで歌う曲を聴いてると、下の階にいる母さんから呼び出しがかかる。買い出しか、あるいは家事の手伝いでも頼まれるんだろう。…特に断る理由はないし、さっさとリビング行くか。

「あ」
「うわ…」

いきなりこんなセリフを吐いちまったのには目を瞑って欲しい。何せ軽い気持ちで開けたドアの先に、ソファを占領してる姉貴（絵名）がいやがったもんで。……ああ、クッソ。

「ちょっと、〝うわ〟って何よ　〝うわ〟って。こっちのほうがため息つきたい気分なんですけど」
「へーへー…そうかよ」

なんで絵名（こいつ）は俺が悪態つくたびに噛みついてくんだよ…、ったく。
母さんから呼ばれてるし、すぐに相手してんのがアホらしくなったんでスルーを決め込む。後ろでサルみたいにキーキー喚き立ててるみたいだが、何も聞こえない（）

「んで、何か用でもあるのか？」
「そうね〜。実はお母さん、この前学校から彰人が帰ってきた時にたまたま拾っちゃったものがあるのよ」

普段よりも少しトーンの高い声で母さんは言う。なぜかわからん

が…上機嫌なのには間違いなさそうだな。俺、褒められるようなことした覚えねえぞ？
ふと疑問に感じていると、母さんは懐から見覚えのある紙を取り出した……って、こいつは!?
「俺のテスト結果じゃねえか!?」
「また悪い点取ったんじゃないかって心配になっちゃったので、こっそり拝見させてもらいました♪」
そう、母さんの手中にあったのはこないだの中間テストの得点と俺の総合順位が記されたプリント。ずっとカバンに入れておいたつもりだったのに、よりにもよって母さんに盗られてたのかよ…全く気づかなかった。
「え～なになに、彰人のテストぉ？　私にも見せてよ」
気味の悪い猫撫で声を上げながら絵名が擦り寄ってくる。きっと弟(俺)のしょうもないテスト結果を見て嘲笑ってやる腹づもりなんだろう。
「ふふ。ほらこれよ」
「わーい。ありがと、お母さ――――!!??」
…だが、現実はちと違う。
常に赤点ギリギリの科目だらけだった中学の頃とは正反対に、俺は今回の中間テストで全教科とも平均点を大きく上回る結果を叩き出していた。８０点台の答案が返ってきた時は思わず自分の目を疑ったりもしたっけな、たしか。
「あああ彰人、アンタ一体どんな不正を働いたらこんな点数取れんのよ!?」

「誰がするかそんなこと」

そしてこうなると予想してたから、絵名にだけは絶対見られたくなかった。…おい、俺を犯罪者でも見るような目つきで睨むな。

母さんには後々報告する気でいたが、絵名が乱入したせいでひでえお披露目になっちまった…。

「お母さんもほんとびっくりよ。いっつも危なっかしい点数ばかり取ってた彰人が、こんなにも勉強を頑張ってたなんてね」

「ん。まあな」

そんで母さんは純粋に俺の努力を褒めてくれた。照れ臭くてまともな返事が出てこなかったけど、褒められるってのはやっぱり嬉しい。次からも頑張ろうと思えるし、モチベーションの維持にもつながる。絵名が悪魔なら、母さんはまさしく天使だな。

「絵名、あなたも頑張んなさい」

「うっ……はい」

悪魔が天誅喰らってら。絵名の成績も決して良いとは言えないし、俺のテスト結果を知った上でのこれはかなり堪えそうだ。

「ねえ、教えなさいよ」

「は？」

「アンタがこの短期間で勉強できるようになったカラクリに決まってんでしょ。洗いざらい吐いてもらうから」

「……」

とりあえずそれっぽい事実だけは言っておこう。

「別に大したことは何も。強いて言うなら勉強の仕方を工夫した程度

だ」
「ふ～ん、工夫ってどんな？」
「……言わねえ」
「はい？」
「だから、誰がお前に教えるかっつってんだよ。ばか絵名」
「はあ!?　実の姉に向かってなんなのよ、その態度！」
「悪いがこればっかりは教えられねえ」

…いや本当に、あの人のことを俺が勝手に話してしまうのは道理に合わない。要領のいい勉強も…勉強する意味とか大切さも、全部あの人から教わったことだからな。
こはねが通う宮女の教師――潮田　渚さんとの出会いがなければ、きっと俺の中の価値観がこんなにも変わることはなかっただろう。

◆◇◆◇◆◇◆◇

「もうダメ限界。頭がパンクしちゃう…」

俺たちが初めて出会ったのは何の変哲もない休日の午後。
この日は謙さんの経営するカフェ＆バー、『ＷＥＥＫＥＮＤ　ＧＡＲＡＧＥ』の一角で中間テストに向けた勉強会を開いていた。提案者のふたりには強制参加を宣告され、俺と杏に逃げ場なんて存在しなかった。
その成果に関してだが……言わずもがな。勉強に対してやる気のわかない俺たちが順調に課題を解けるわけもなく、ペンを持つ手がふたり仲良く停止してる。高１の数学ってこんなに難しいもんなのか？

「いいや、彰人。まだこの範囲は基礎の基礎だ。これより難しい問いはいくらでも出てくる」
「エスパーかお前は」

いや、冬弥がナチュラルに俺の心読んできたのも驚きだけどよ…それ以上に絶望的すぎんだろ。この調子だと赤点不可避じゃねえか。

「え……つまり私と彰人の人生、終わりってこと？」

「お前のオブラートは何も包めねえの？」

こっちだって泣きたい気分だわ。

っつか、その狼狽えようのせいでこはねがさっきからずっとあたふたしてんだよ。頼むからいつもの杏に戻ってくれ。

――――――…

「おじゃまします」

「お、いらっしゃい。お客さん、この店は初めてですね？」

「はい。最近こちらに越してきたばかりで」

「ほーう…そういう人がビビットストリートに興味を持ってくれるとは珍しい。大抵は通りの雰囲気を見て、全然寄り付いちゃくれないんですがねえ」

「え、そうなんですか？　さっきも普通に挨拶とか軽い世間話とかしてたんですけど、みんな気前のいい人ばかりでしたよ」

「はっはっは！　そうでしょうそうでしょう」

？　入口付近が騒がしい。謙さんの陰に隠れて見えないが、聞こえてくる内容だけでもなかなか肝の据わった客が来たようだ。それでいて物腰が柔らかく優しい話し方をする。この通りじゃこはね並みに希少なタイプの人間だな。

「あ…」

「こはね？」

すると今しがた入店してきた客の姿を見て、こはねが驚く。ツヤめく水色の髪と女性のような線の細さを併せ持つその男…確かに珍しい容姿をしてるとは思うが、何もそこまで意外だろうか。

「――小豆沢さん？」
「ど、どうも」

「「ん？」」

今度は俺たちが困惑する番だった。こはねと目の前の男性客が知り合い同士というまさかの事実に、杏も冬弥も頭に疑問符を浮かべている。

「えと…こはね。そちらのお客様ってもしかしてこはねの友達？」
「ともっ…!?」

お相手は鳩が豆鉄砲食らったような表情してっけど、これに関しちゃ俺も杏と同意見だ。ぱっと見は俺らとギリ同世代か一つ年下くらいの印象受けるし。

「ち、違うよ杏ちゃん。この人は友達じゃなくて、私が通う学校の先生。私たちよりもずっと年上のお兄さんなんだよ」
「またまた～。こはねったら、冗談が上手いなあ。君も恥ずかしがらずに『友達です』って言っちゃえばいいのに」
「――――」
「……あれ？」

おい…マジかよ。俺は感じたままの言葉を表に出さなかっただけ杏よかマシだが、あいつはもうフォローできねえ。完全に地雷を踏み

抜きやがった…。
「ア、ハハハ。僕、モウ教師ヤメヨッカナ…」
「渚先生ぇ!?」

ナギサ?せんせーの精神が壊れ、その姿を見たこはねが悲鳴を上げる。そうなれば当然このカオスな状況が謙さんの目に留まらないわけがなく、杏はこってり絞られる羽目になっている。
…いや、もうツッコみどころがわからねえよ。冬弥はおっかなびっくりして固まっちまってるし…。

おいそこ、誰がエンターテイナー集団だこら。

☆

――――――――

「ああ、そうか。君たちが小豆沢さんの言っていたチームメイトだったんだね」
「はい。どうぞよろしくお願いします」
「うん、よろしくね。…て言っても今はプライベートだからそんなに畏まらなくていいよ。ちょっと気のいいおじさんくらいの認識でいてくれた方が僕も楽だし」
「それとは程遠い若々しさしか感じられないんすけど」

――あのあと何があったかと言えば、渚さんが杏の誠心誠意の謝罪を快く受け入れてくれたおかげで全て丸く収まった。
さすがは〝先生〟というか、杏の心にしこりが残らないよう優しく気遣う姿は大人の対応として完璧なものだった。それを見せられた今、あの人が俺らとタメである可能性を疑う余地はない。

「そういえば…本当に僕が君たちの輪に混ざってていいの？　大人と相席なんて落ち着かないだろうに」
「いえ、むしろこんな形でしか詫びができない俺たちを許してください。杏が渚さんに失言かましたことと比べたら、こんなんじゃ足りないくらいですから。だろ、杏」
「も、もちろん！　だから、気にしないでくださいね。渚さん！」
「そう？　ならお言葉に甘えさせてもらおうかな」

詫びたい気持ちは尤もだが、何よりこの人は他の大人と比べて親しみやすい。謙さんや母さんを卑下して言ってるんじゃなく、純粋にそんな気がした。
渚さんがすげー策士なのか、単に俺がチョロいだけなのかはわからない。だが、自分よりずっと未熟な子ども（俺たち）と同じ目線で話をしてくれる、聞いてくれるだけでこんなにも嬉しく感じられるとは思わなかった。

カップをソーサーに置き直した渚さんは、スペース確保のためにテーブルの隅に移した問題集の山を一瞥し心底懐かしそうな顔を浮かべて言った。

「友達と喫茶店に集まってテスト勉強、か。青春だね」
「ふふっ。渚先生、おじいちゃんみたいな喋り方になってますよ」
「僕にとっては大事な思い出だもの。学校行事とはまた別の意味で濃いイベントだったからさ」

テストが思い出に残るってどういうことだ？　俺だったら問題用紙に書かれたあの文字の羅列を見るだけで目を逸らしたくなるってのに…。どう考えても誇張して言ってるようにしか思えねえ。

「計画通りにいってる？」

「は、はい！」
「俺と小豆沢は至って順調に進んでます」
「「うっ…」」

勉強の進捗状況について聞かれそうな雰囲気はしてたがやっぱり来やがった…。別に減るもんじゃないとはいえ、『自分は全然勉強のできないバカ』だと公言すんのにはどうしても抵抗がある。それを自覚してか、隣からも杏の短い呻き声が上がった。

「そっちの二人は――――絶賛苦戦中って感じだね」

そう言って渚さんは苦笑い。
まあ…こんなあからさまな反応示しといて、勘付かれない方がおかしいわな。

「ちなみにどの教科が手詰まりなの？」
「「……全教科」」
「うっ、う～ん…全部か」

彼は一瞬だけ面食らうとすぐに何かを考え込むような顔つきになる。
返ってきた答えが余りに酷すぎて呆れられたか…。そう考えてると、3、4秒ほど間を空けてから俺たちに新たな問いが投げかけられる。

「それじゃあ、二人は勉強するのが嫌いってこと？」
「嫌い、とは違うっていうか…」
「『こんなことして何の意味があるんだろ』って感じてるんです。ストリートミュージックやってる身なんで、英語だけならまだ気合い入れて勉強できるんすけど…」
「他の教科が足を引っ張り、結果として全体のレベルが向上しない―

と」

図星だ。先生ってのはできないやつがどうしてできないのか、一言二言話すだけでわかっちまうんだな…。

「なるほどね。君たちのその考えには理解も共感もできる。…その上で言わせてもらうけど、勉強は決して無意味なものなんかじゃないよ」

「っ」

腹の中にずっしりと響くような衝撃だった。普通の先生がするような説教よりもこの人の言葉は数倍重い。瞳に宿る本気(マジな)の想いに当てられて俺はたじろんだ…。

渚さんは続ける。

「厳密に言うと、勉強を通して得た知識と経験にこそ価値(意味)がある。例えば、周囲に融通を効かせるための裏付けとして活かしたり、ミュージシャンとしての経験とを併せて将来の選択肢を増やしたり…必死になって身につけた学力は決して自分を裏切ったりはしない。今後の人生に大きな恩恵をもたらしてくれるはずだ。

恩師からの受け売りだけど、僕が伝えたいのは『自信の持てる第二の刃を磨け』ってこと。音楽という最強の武器と勉強で培われた第二の刃が揃った時、君たち《ＶｉｖｉｄＢＡＤＳＱＵＡＤ》はきっとさらなる高みへ登れると思うから。その期待も込めて、応援(エール)を送りたい」

……中途半端に励ますでも、頭ごなしに勉強をしろと強要するでもない。そんな渚さんなりの人生観を聞き終えてなお、俺の中にはあの夜を目の当たりにした感動に近い余韻が残っている。

この心持ちの変わりよう…教師という役職柄を抜きにして考えて

も、潮田（この）渚（人）はある意味バケモンだ。やる気を引き出すのが上手すぎる。この説得力も、恐らく本人も同じような経験をしたからこそ強く感じられたんだろう。

第二の刃……ね。

「――すんません。今から勉強、再開してもいいですか？」
「彰人？」
「いやまぁ、これも『ＲＡＤ　ＷＥＥＫＥＮＤ』を超すための訓練だと思えば…多少は苦じゃなくなる気がしたんで」

そうだ…少し見方を変えてみれば、苦手なことでも真正面からぶつかろうと思える。現実から目を逸らし続けた自分の尻をぶっ叩くような原動力（やる気）がみなぎる。

そうと決まれば、後は早かった。

「っ、私も負けてらんない！　勉強が憂鬱で仕方なかった気持ちとは金輪際サヨナラよ！」
「す、すごいっ。杏ちゃんがいつになく燃えてる…」

ああ、でも…。この問題集の解法なんて、ほとんどちんぷんかんぷんだ。攻略のとっかかりが掴めない限りは教科書参考にして地道に解いてくしか――…

「こほん。折角やる気になってくれたところで悪いんだけど、ちょっといいかな？」
「？」
「僕には二人を焚き付けた責任がある。だから、宮女の教師としてでなく、たまたまカフェで知り合った客として二人に色々アドバイスができたらと思ってる。

どう？　やってみる気はない？」
「え？　たしかにすごく頼りがいがありそうなお誘いですけど……でも――」
「大人ってね、すごくずるい生き物なんだ。公私の区別さえはっきりしていれば上も咎めようがないし、君たちの心配には及ばないよ」
渚さんは悪そうな笑みを浮かべて――それでも優しさが拭いきれてないが――俺たちに交渉を持ちかける。宮女代表のこはねはこの提案に反対するどころか、たしかな信頼を寄せるように終始微笑んでいた。
邪な感情なんて一切ない、渚さんの本心と好意。この場面においてそれを拒む選択肢なんて存在するんだろうか……いやないわ、想像できねえ。
「よろしくお願いします…！」

◆◇◆◇◆◇◆◇

――こうして始まった渚さんとのテスト勉強会は、一週間のうち土日限定という超短期間で行われた。平日には独自の課題をこなすよう指示されたり、勉強スタイルの矯正を施されたりと、それはそれは手厚いフォローもしてくれた。
中間テストまで残り四週間という余裕のある時期にスタートしたこともあって、当日までに基礎知識はほとんど吸着。さっきも説明した通り、歴代最高得点を記録することに成功した。
「すごい、すごいよ二人とも！　よくここまで頑張ったね」
「渚さんに教わった通り攻略（解き進め）したら楽勝だったし、これくらい当然ですよ！」
「…っす」

杏も俺と同様に好成績を収めたことで上機嫌だが、対する俺は喜びと僅かな後悔の間でジレンマに陥っていた。
結構な手応えを感じたのに現実はケアレスミスや途中式の誤りが多く、点数をぽろぽろ落としている。〝本気〟で挑んだ勝負だからこそ、こういうちょっとしたミスですら……すげぇ悔しい。
「でも！　今回の結果に一喜一憂せず、これからも勉強は継続させること。第二の刃を磨き続ける日々にゴールなんて存在しないからね」
「っ……はい！」
「ふふっ。よかったな、彰人」
「おう。勉強はだいぶ自信がついたからな…歌の方も負けてらんねぇぜ」
テストまでの間、決して練習をおざなりにしていたわけじゃない。それらを四苦八苦しながらも両立できるようになった今、俺たちにはどうしてもやりたいことがあった。それは、
「渚さん！　私たち前々から話してたんですけど、勉強に付き合ってくれたお礼に…渚さんに贈るスペシャルパフォーマンスを披露したいんです！」
「い、今から!?」
「はい。俺たちの持てる最高の武器を、誰よりもあなたに見届けてもらいたい」
――――――…
しばしの沈黙。すると渚さんは朗らかな笑顔とともに答えを出してくれた。
「折角の観客（ゲスト）が僕なんかでよければ喜んで。

それに…僕も気になってたからね、君たちの　〝本気〟　ってやつが」

「…！　上等っすよ。その余裕ぶっこいた表情、絶対崩してみせますから」

意外にノリも良く熱い人だ。相手にとって不足はない。

《　Ｖｉｖｉｄ（俺）ＢＡＤＳＱＵＡＤ（たち）　》のセカイに引き摺り込んで、他のユニットに目移りできないよう身体と心に刻み込ませてやる。

これが『ＲＡＤ　ＷＥＥＫＥＮＤ』を超さんと集った、想いの力だってな…！

文化祭の時間

宮益坂女子学園　文化祭。

油断した…。あれよあれよと生徒たちにされるがまま、文化祭のコスプレショーに参加させられた僕は今になってすごく後悔している。……もう皆まで言わずともわかるだろう。

「どうしてこうなったぁ!?／／／」

現在進行形で例のアレ――女装を施されているのだから。

しかも、飛び入り参加の癖にちゃっかり最カワイイ賞を掻っ攫ってしまったし、ほんとに解せない。（というか最カワイイ賞って何？）

…さらなる追い打ちとして、最カワイイ賞受賞者は残りの文化祭をずっとこの格好で過ごさなければならないというのだから迷惑な話だ。ショーは午前に行われたので、この拷問があと半半日続くと思うと胃が痛くなる。

（このあとも仕事が残ってるっていうのに…）

憂鬱な気持ちが一際大きいのにも理由がある。それは、担任として自分のクラスが運営する催しを常時確認していなければならないから。

宝探しのカギとなる謎解き。それらが出題されるポイントを巡回するのが僕の役目なのだが、それはつまり…宮女の生徒に限らず外部から訪れたお客さんの目にもこの姿が留まるということを意味している。（もう何人かには見られてるんだけど…）

そうなれば周囲の反応の良い悪いに関係なく、僕のメンタルがどんどんすり減っていくのは確実だ。カルマと中村さんに

悪戯(女装を強いられた)を仕掛けられた時のように身内で完結することじゃないんだもの…。

――けれど、既に賽は投げられた。

こんな中途半端なところで逃げ出してしまうのは生徒の手本として相応しくない。多少注目を浴びることになるのも覚悟の上だ。

ものすごく…ものすっっっごく不服ではあるが――

「やるしかない…！」

教師としての務めと羞恥心をかけた僕の秤は、前者の方に大きく傾いた。

◆◇◆◇◆◇◆◇

宮益坂女子学園　中庭。

「すきあり！　絵名のギョウザもーらい！」

「ちょっ、ずるいわよ瑞希！　私まだ一個しか食べてないのにっ！」

「待って…二人とも。人混みに酔って気持ち悪く――――う〝っ…」

「「奏ぇ!?」」

やっば…奏がグロッキーになっちゃった。急いで木陰に連れて行って休ませないと。

ええとええと……あっ。あそこならベンチもあって丁度良さそう。

「よいしょ、っと。奏大丈夫？」

「うん。なんとか…」

「やっぱり人混みと直射日光のダブルパンチは奏にはキツかったみた

いね。落ち着くまでゆっくり休ませてあげましょう」
「そだね」

参ったな…。愛莉ちゃんたちのそっくりスイーツを筆頭に思わず目移りしちゃうような屋台がいっぱいあって、ボクも配慮が足りなかった。

生憎手持ちに水はないし、絵名も同じように水を切らしてしまっている。これじゃ奏に水分補給をさせてあげられない…。

「少し休憩すればまたすぐ歩けるようになるよ。そんなに気を遣わなくても…」
「ダメよ！　夏じゃなくても熱中症になり得るケースだってあるんだから」
「そうそう。だからここは大人しく絵名の言う通りにしといたほうがいいよ、奏。意地でも立ちあがろうとしたら、きっとすごい剣幕で取り押さえられちゃうだろうしね」
「流石にそこまではしないわよ」

普通に会話に混ざってくる様子からして本当に大したことないのかもしれないけど、奏の虚弱さは舐めちゃいけない。またふとした拍子に倒れて怪我でもしたら大惨事だ。

「ボク自販機で水買ってくるから、絵名は奏のことお願いね！」
「うん、わかっ…――――ちょ瑞希！　前見なさい前！」
「へ？」

と、二人のほうを振り向きながら走り出したのが良くなかった。絵名の注意が聞こえた瞬間には時すでに遅く…ボクは真横から歩いてくる人影と思いっきりぶつかってしまった。視界に入った水色のシルエットが揺れ、ボク達は同時に尻餅をつく。

「いたたぁ…。ごめん、大丈夫――!!」

相手の姿を捉えると、骨の髄まで迸(ほとばし)るような衝撃がボクを襲った。

「こ、こちらこそごめんね。全然前を見てなくて…」

――カワイイ。ただその一言しか思い浮かばなかった。

ミドル丈に青藍色のワンピース、丸を基調とした白いエプロン、ヘッドドレスを纏うその姿は一目でメイドの衣装(コスプレ)だとわかった。猫耳のカチューシャとドラえ○んのような金色の鈴まで付いてて、さらにカワイイ…!「ちなみにこれ、きちんと元ネタが存在します。気になる人は『殺せんせーQ(クエスト)!』を要チェックですよ」

女の子にしてはやや短めな水色の髪がギャップを引き立て、本当によく似合ってる。これほどの逸材が存在したのかと思うとびっくりだ。時の流れを忘れて見入っていると、その子から心配そうに声をかけられる。

「ホントに大丈夫? どこか痛むところはない?」

「ううん、平気だよ。こうやって普通に立てられるから。心配してくれてありがとう」

「ほっ…よかった」

いやヤバ。はにかんだ表情もカワイすぎでしょ。この大胆な格好に慣れていないながらも他人を思い遣る健気な姿は破壊力抜群だ。見る人が見れば思わず卒倒しちゃうね、これ。

……む? 何やら背後から怒りを孕んだ物騒な足音が。

「ほら言わんこっちゃない! きちんと前見なきゃダメで…しょ……」

どすどすと音を立て、怒りを隠そうともしなかった絵名の動きが目の前にいるメイドさんを見た瞬間に停止する。
絵名の周りに小さな宇宙が生まれ、彼女はその中心をぐるぐると回り続けている。…なかなか呆然とした状態から戻らないので思い切って声をかけた。

「おーい絵名〜、戻ってこーい」
「――――ハッ！」

あれ？　もしかして気絶してた？
なんて心配した束の間…

「ねえねえあなた！　私と一緒に写真撮りましょ！　絶対悪いようにはしないから、ね？　この通り！」

うわぁ…めちゃくちゃ早口でツーショットの許可ねだり始めたよ、この陰険自撮り女。カワイイ子をダシに「いいね！」をいっぱい獲得したいって魂胆が見え見えだ。
ボクや奏はともかく、下心丸出しのゲスな事情にこんな穢れを知らなそうな子を巻き込まないでほしい。

「え…っと、写真撮影はＯＫしかねてるので、その…ごめんなさい／／／」
「はーい、チェキ会はＮＧだって。大人しく諦めるよ、絵名」
「ぐぬぬ…なら三千円からで！」
「それもう別の商売だから!?」

絵名、流石にその橋は渡っちゃいけないよ。

「というか、奏をちゃんと見てるって約束はどうしたの…」
「あ」

「おい」

完全に我忘れてたんかい。ポンコツか。

そんなボクたちのやりとりを聞いていたからか、メイドさんも木陰に座っている奏の姿に気づいたようだ。…こんな優しい子にこれ以上心配をかけさせるわけにはいかないな。

「しょうがないなあ。すぐに水買ってくるから今度こそ奏のこと頼んだよ、絵名！」

対して…奏のためとか、メイドさんに気を遣わせないようにとか、色々考えを詰め込みすぎていたボクにはその瞬間（とき）が来るまで気づくことができなかった。

悪寒を催す下卑た悪意と欲望が、ボクの背中にひっそりと纏わりついていることに。

◆◇◆◇◆◇◆◇

（水水っと。…よし）

中庭から程近い位置にあった唯一の自販機は人気の無い校舎裏に置かれていたものしかなく、ここにおいては文化祭の華やかさと隔絶されているような雰囲気を感じた。

…ここに長くはいたくない。お目当ての代物は手に入ったし、早く退散しよう。

そう思った矢先――

「ねえ、そこのお姉さん。ちょっといいかな？」
「！　……」

タイミングを合わせたかのように、ガラの悪い二人組の男がボクに迫ってくる。耳ピアスをこれでもかとつけていたり、ダボっとした締まりのない服を着ていたり、彼らは典型的なチャラ男だった。
…はあ、全く面倒(めんど)くさい。こう陰でこそこそ誘ってくる人にロクなやつがいないのはすでにわかりきっている。簡単にあしらえたら苦労はしないんだけど――

「何、お兄さんたち？　もしかして口説いてる？　悪いけど友達を待たせてるから、そんなに悠長にしてる暇無いんだよねぇ」
「くひひ…そうつれないこと言ってくれんなよ。ただ一緒に遊ぼうぜって誘ってるだけだろ？」

くどい。そして、ウザい。
おそらく、ボクが「ＹＥＳ」と頷かない限りしつこく粘着してくるタイプなんだろう。多少強引に押し通すか、走って逃げてやり過ごすかで悩むけど…後者は最終手段だ。今は話題をひたすら逸らしまくって、抜け出すチャンスを窺ってみる。

「そういうのは間に合ってるからさぁ、また出直して来てよ。今度はもっとスマートな格好で誘ってくれると嬉しいかな」
「まあ、そう言わずによお…」

「――――おい、ちょっと耳貸せ」
「ちっ。んだよ？」

初めて対面した時から口説きもせず、ボクをじろじろと見つめていたもう片方の男の表情が変わった。
得も言われぬ嫌悪感…それはかつて幾度となく経験したものと同

じ匂いがした。

やめて、いやだ…。

「は？　まじ？　こいつ――――なのかよ」
「ちぃと肉付きがいいだけかと思ってたがよ…喉元とかみてみろ。ほら」
「……うわ、ガチじゃん。俺らみたいなバカ釣って愉悦に浸ってるとか趣味悪すぎ。キモいの域越えてるわ」

うるさい…。
キミたちなんかに言われなくても、ボクが最低なやつだってことくらい自分が一番よくわかってる。
…けど、そんなボクの意思とは無関係に、彼らが振るう心無い言葉の刃（ナイフ）は容赦なく胸を突いてとどまる所を知らない。
楽しいはずの文化祭に来てまでどうしてこんな辛い目に遭わなくちゃいけないのか、まるでわからなかった。この拷問に等しい時間が早く終わってくれと、心の底から願い続ける。

（誰か、助けて……）

「感心しないなあ」

「「　！　」」

「寄って集って女の子を口説こうなんて……かっこ悪いね、君たち」

酷く冷めた声が聞こえた先には、ボクがついさっきぶつかったばかりのメイドさんの姿があった。その突然の登場に、ボクはもちろんチャラ男の二人組も唖然となってその場に立ち尽くした。

「あ？　いきなりしゃしゃり出てきて何なのお前」

「関係ないやつは引っ込んでろよ。俺たち別に悪いことしてるわけじゃねえんだぜ」

「……」

衝撃から再起した二人は横槍を入れられたことに機嫌を悪くし、ボクからメイドさんへと標的（ターゲット）を切り替える。喧嘩腰の態度から放たれる口撃は鋭利そのものだけど、彼女はそれにすごむことなく…むしろ真っ直ぐに相手を見据え続けている。まるで狩人（ハンター）が獲物を狙い定めるような、そんな姿を幻視させた。

「へえ…じゃあ君たちは、そちらの彼女に辛そうな表情（かお）をさせているのが悪いことじゃないとでも？」

「それ、は――」

「ふざけるな」

刹那、一点に凝縮された怒気が瞬く間に解き放たれる。

…脚が凍って動けない。ボクですらこんな有様なのだから当然、直

接もろに受けたチャラ男たちはこの世の終わりみたいな顔に変形し、玉のような脂汗を滴らせていた。

「相手の気持ちを尊重(思い遣れ)できず、侮辱することしか能のない不良生徒はこの学園に立ち入る資格は無い。反省する気がないのなら、即刻ここから立ち去りなさい。

…それとも」

「っ…！」

「そのふざけきった容姿と態度を、余すことなく手入れして欲しいのかな？」

そう言って、ボクとチャラ男たちの間に彼女は立ち塞がる。

目の前にいるのは本当にあのメイド(子)なんだろうか…。何かが乗り移ったかのような変貌ぶりに我が目を疑ってしまう。カワイイ要素の息が完全に止まり、逆らうことすらおこがましい最恐の修羅が…そこに佇んでいた。

「んだよテメェ、先公気取りのつもりか…」

二人組のうち一人がそんなセリフを吐き捨てる。ようやっと絞り出せた言葉なのか、弱々しく震えていた。

「〝気取り〟も何も、歴とした先生だもの。道を違えた不良(子ども)を諭すのは当然だよ」

「「……は？」」

これには思わずボクも本音が漏れ出た。
この学園の演技派生徒が背伸びをしているだけなんじゃないかと何処かで思っていたけれど、言われてみれば確かに…あの怒り方は格が違った。実際、とても現役高校生に怒られている気がしなくて背筋がゾワっとしたし。

「嘘、だろ？　こんなお肌ピッチピチの女教師がこの世に存在するのかよ…」
「メイド服がっつり着こなしてるから全くわからんかった…」
「――――」ピキッ
「ヒエッ…」

再び漏れ出る怒気はさっきよりも密度が増していた。心做しか周りの気温が2、3度下がったような…。

「僕のことはどうでもいいよ。それで？　彼女に何か言うことは？」

「「さ、さーせんした！」」
「あ、はい」

天罰が下って欲しいとは心の隅で望んでたけど、二人がした行為と応報は全然釣り合っていない気がする。メイド先生の圧倒的な気迫にビビりちらかすチャラ男たちは滑稽というより、むしろ気の毒に思えてしまった。
謝罪を済ませて逃げるように退散する彼らを見届けると、ふうっと大きなため息を吐く声が聞こえてきた。

「こういう日には羽目を外す輩が多くてね。目を光らせておいて正解だったよ」
「あ。そういえば…どうしてボクの居場所がわかったんですか」
「君の後をつける怪しい二人組を、さらに僕が追跡しただけさ。ただ

のナンパで済みそうな雰囲気じゃなかったから、後先考えず飛び込んじゃった」
「そう、だったんですね。ありがとうございます」
「ふふ。どういたしまして」

優しい人だ…。見ず知らずのボクなんかのために、あんなに怒ってくれるなんて思わなかった。全然煙たく扱われなくて、逆にどう反応していいのかちょっと困ってしまう。
けれど拷問から解放されたおかげか、今は心がとても軽く…そして暖かい。

「さあ、急いで友達のところへ戻ろうか。乗りかかった船だし最後まで付き合うよ」
「……それなら、お言葉に甘えさせてもらっていいですか？」
「もちろん」

悪い人じゃないのは確定してるし、先生を名乗るだけあってとても頼りがいがある。何より、打算もなければ裏表もない純粋な好意を受け取らないのは失礼極まりない。
そう考えて了承の意を示すと、この上ない笑顔が返される。あはは、ボクには眩しすぎるよ…。

「――さっきの会話」
「！」
「全部聞いていたわけじゃないけど、これだけは…どうか忘れないで欲しい。

君は君だ。誰に何を言われようと、自分の意思を以て君らしく生きていい。もし周囲の目が怖くなって、自信を失くしてしまいそうな時

は意地でも自信があるふりをしよう。背を丸めていては舐められる…これが自分なんだ、自分の生き様なんだって胸を張り続けるんだ。そうすれば大抵の小心者は黙らせられる。
それでも…どうしようもなく苦しい時は迷わず僕に相談して。どんな場所にいても必ずマッハで駆けつけるから」

両手を力強く握られ、気付くとボクの手の中には電話番号の書かれた紙切れが収まっていた。

もう……言ってることとやってることが無茶苦茶だよ、この人。可笑しくて涙出ちゃう。
――でも、

「ぷっ、あはは。マッハで助けに来るとかかっこいいけど誇張しすぎでしょ～」
「む。心外だなあ、それくらいの気持ちと覚悟を持ってるって意味なのに」

嬉しい…。
人の優しさに触れる暖かさが、五臓六腑に染み渡ってゆく。可笑しさで涙が出そうなんじゃない、嬉しくて涙が出そうなんだ。
…ダメだよ、ボク。ただの嬉し泣きで今日初めて出会ったばかりの人に心配かけさせちゃ。ましてやまだ名前だって知らない、のに……あ。

「名前」
「ん？」
「まだボクたち、お互いの名前知らないですよね？」
「そんなわけなｉ――うん、あったね…」

すっかり自己紹介を済ませた気になっていたけど、思い返せばボク

はこの人が宮女の先生ということしかわからない。それは向こうも同じようで、「面目ない…」と言いながら頭を掻いている。

「僕は宮益坂女子学園２年Ｂ組の担任、潮田　渚です。どうぞよろしく」

「暁山　瑞希っていいます。こちらこそよろしくお願いします、渚さん」

〝ボク〟　をちゃんと見てくれる大人がいる…。その事実を噛み締めるだけで幸せな気持ちになれた。

彼はまさしく、お姉ちゃんたち家族だけしかいないんじゃないのかと、半ば諦めかけていた時に差し込んだ一筋の光明だった。

潮田　渚――ちょっと変わってるけど底抜けに優しい彼女にも、いつかボクの秘密を話せたらいいな…。

「潮田先生…？」

「朝比奈さん!?　どうしてここに!?／／／／」

「絵名（友達）に緊急事態だからと呼ばれて来たんです。あと…」

「？」

「よくお似合いですよ」ニコッ

「……／／／／」カァ～～！

「「　Ｗｈａｔ、ｓ？　」」

そのあと、まふゆのクラスの担任が渚さんという事実と彼の性別が♂（オス）という事実に、三人揃って頭をパンクさせられたのは別のお話。

大人の時間・3時間目

椚ヶ丘市　居酒屋あずさ。

「グッグッ……ぷはぁ！　蛍(ほたる)ちゃん、ほろよいのおかわり追加で」
「わかりました」スタスタ
「今日は随分頑張るじゃん、渚。いつもならここいらでギブアップしてるのに」
「カルマに無理やり飲ませられるのと違って、ここなら自分のペースで飲めるから。そう簡単に潰れるつもりはないよ」
「ははっ、言うねぇ」

休日の夜、僕は椚ヶ丘に佇むとある居酒屋でカルマと共にお酒を呷いでいた。店主の梓(あずさ)さんは『古くてしがない店』の一点張りだが、どんなお客さんも包み込んでしまう優しさと暖かさで溢れるこの居酒屋はとても魅力的だと思う。
殺せんせーや腕利きの殺し屋たちが、ここへ心の傷を癒しに来ていた気持ちもよく分かる（僕らは卒業後にそれを知った）。

「はい。ほろよいと、サービスのおつまみです。あんまり飲みすぎちゃダメですよ」
「あはは…蛍ちゃんにそう言われると敵わないなあ。どうもありがとう」

ニコリと静かに微笑む蛍ちゃん(彼女)は本当に可憐な女性だ。初めて対面した時は驚いたけど、容姿だけでなくお互いに性格も似ていたので、打ち解け合うまでにそう長い時間はかからなかった。

「カルマは――まだ全然余裕そうだね」

「俺も今日はとことん飲むつもり～。この日のためにプロジェクトの準備は万端にしてきたし」

「記憶無くすから安心してグチれる」と、サシで飲む度に僕を潰してくるカルマは流石に強い。この場合　〝酒豪として〟　だけど、実は社会的にも相当高い地位を確立しているのだとか。

派閥争いの多い経産省において、理想に固執し過ぎることは自己の破滅を意味する。そんな状況下でも、カルマは『災害時に役に立つ官僚になりたい』と我を貫いてきた。同期の裏切りで一度は瀬戸際に立たされたそうだが、今では彼に逆らえる者はいないらしい。

「で。茅野ちゃんとのデートはどうだったの？」

「いや唐突！　話的に何の脈略も無かったよね⁉」

隙あらば弄り倒そうとする辺りホントいい性格してるよ、この男は。仕事に熱心に取り組む姿勢は尊敬できるのに、こういう意地の悪い一面のせいで全部帳消しになってるんだよなあ…。カルマらしいと言えばらしいけど。

「まあ…ちゃんとエスコートはできたかな。茅野も楽しんでくれてたし」

「ふ～ん。他には？」

「他？　偶然会った僕の教え子と茅野が仲良くなったり、再来週茅野が出演するドラマの撮影現場に行く約束したり、とか」

「夕陽をバックに熱烈なキスを…」

「してないから⁉」

「え～、つまんないの」

もはや何度目かもわからない揶揄（キスネタ）いにげんなりしてしまう。カルマのこのトレンドは十二年間不動だが、未だに僕には有効なので心臓に悪い。慣れろと言われて慣れるようなものじゃないんだよ…正直。

「ま。二人の進展具合はさておいて、そろそろゲロってもらおうか」
「？」
「……思い詰めた顔してさ、何に悩んでんの？」
カルマは真剣に、しかし優しげな声色でそう問いかける。表情に出してたつもりはなかったけど、カルマの目には全て見透かされていて心臓が飛び跳ねそうになった。
…彼の言う通り、確かに気に病んでいることはある。とはいえ、この難題ばかりは教師である僕が自力で解決しなければならないことだ。
変な心配をかけさせたくなくて話してみるか否か僕が躊躇っていると、焦れったそうにカルマは口を開いた。
「その道のプロでなきゃどうにもできない悩み事だとしても、正直に吐き出せば少しは気が楽になるんじゃない？　もしかすれば別の視点からのアドバイスだって、できるかもしれないよ」
「！　…うん」
その言葉を聞いて気づかされた。
大人になっていくにつれ、自然と我慢したり、抱え込んだりする場面が増えてすっかり頭が固くなっていたのだと。おかげで視野も狭まり、友達に相談する・話すといったストレス解消法を思いつくことができなかった。
それならば、(もう既に勘付かれているし)ここで下手にうやむやにするより、この苦悩を理解(わかっ)してもらえるよう話した方がいいかもしれない。
僕は意を決して語り出す。

「…教員生活自体は大方順調なんだ。生徒との関係も悪くはないし、みんなの長所を飛躍的に伸ばすための補助(サポート)も徹底させてる。
だからこそ、なのかな。教師個人で出来ることへの限界を感じるようになって…」

四月に初めて出会ってからというものの、未だ　〝本当の〟生徒(朝比奈さん)の顔を知らないこと。
自分に何かできることはないか、模索し続けていること。
彼女が何故貼り付けたような笑顔を作っているのか、その理由さえもわからないこと。
そして、偽物の笑顔の裏で時折全てを諦めたような表情を浮かべていること…。

本人の名前を伏せて、全てをカルマに明かした。

「なるほど。渚が気にかけてるその子…ベクトルは違うけど、まるで昔の茅野ちゃんみたいだねぇ」
「カルマもそう思う?」
「聞く限りの印象としては。…それに憶測だけど、演技の経験がない割に周囲の人間を欺けてるってことは、渚が担任になるよりも前からずっと演じてたんじゃない?　誰もが羨むほど完璧で、隙のない優等生をさぁ」
「!　確かに…」

〝今年に入ってから〟　とは思えないほど、朝比奈さんの振る舞いは自然だった。恐らく、ここ数年に渡り『良い子』を演じ続けているからに違いないだろう…。
なら、彼女を優等生たらしめている直接的な原因は学校や生徒ではなく、もっと近い場所にあるってこと?　まさか――――
「あと、これだけは聞いておきたいんだけど」

「な、何」

僕がそこまで思考を巡らせたところで、カルマはさらに続ける。

「結局のところ、渚の本心はどうなのかな～って」

う～ん、それを聞かれるか…。一応自分なりの答えを持ってはいるが、友達に…ましてやカルマに話すとなると正直恥ずかしい。

大抵は教師としての責任や義務があるから、彼女の境遇を憐れみ同情しているからだと思われるだろう。

しかし僕の場合、そのどちらにも当てはまらない。

「生徒にはみんな笑顔でいて欲しい。

殺せんせーが僕たちに授けてくれた絆と笑顔を、僕も繋いでいけたらって…そう思ってる」

いかにシンプルで幼稚だろうが、あの教室で得た贈り物は僕にとってはかけがえのないものだ。だからこそ、この『想い』を大事にして今まで〝先生〟を頑張ってきた。例え朝比奈さんが相手だとしても、それは揺るがない。

カルマは僅かに息を呑んでから、こんな質問を投げかけた。

「もし、その生徒が渚を拒絶した時は？」

「そうなったらもちろんショックだけど……、それでも根気強く話しかけ続けるよ。嫌われるのも覚悟の上で」

「そっ、か。ほ～んと健気な男だね…」

「私は――」

「「？」」

「私は、渚さんの想いはその子にちゃんと伝わると思います。確たる保証は全然ないんですけど、あのタコさんの背中を見て育った渚さんならきっとできる気がするんです」
「蛍ちゃん…」

殺せんせーのプライベートを知っているからこそできる蛍ちゃんの応援に、胸がじんわりと熱くなる。

ああ、本当に…今日は飲みに来て良かった。
朝比奈さんがあまりに手強くて少し自信を失いかけていたけど、カルマや蛍ちゃんのおかげで僕が先生としてどう頑張るべきかを再認識できた。二人の何気ない優しさが五臓六腑に染み渡り、疲労とストレスがみるみる浄化されていくみたいだ。

「ほらほら〜、見惚れてないでもっと飲みなって。悩んでる時こそイッキだよイッキ」
「んぐっっ!? ちょっ、記憶が飛んだら困るんですけど!!」
「あ、あはは…」

見守ってて、殺せんせー。まだまだ未完成で迷いの多い僕だけど、絶対に…せんせーのような〝先生〟になってみせるから。

思い出の時間

――――星空を見上げるのが好き。物心のついた頃からこの想いはずっと変わらない。
大切な幼馴染と一緒に流星群を眺めた時なんて、空に向けて手を伸ばせばお星さまを捕まえられるんじゃないかってはしゃいでいた。首が痛くなるまで、ひたすらに。

そんな幼い私たちの記憶を飾る綺麗な星空。そこにはいつも…白く煌めく三日月の姿があった――――

◆◇◆◇◆◇◆◇

「みてみてみんな！　こんなにたかくのぼれたよ！」
「さ、さきちゃんっ!!　いつのまにのぼったの!?」
「えへへ～、すごいでしょー」

ある冬の日。
咲希が背の高い木の上に登って、自力で降りられなくなってしまったことがある。最初は自慢げで意気揚々としていた咲希だけど…そんな彼女から徐々に余裕が失(な)くなってゆく姿は、見ていてとても耐えられるものじゃない。
――気づいた時には、考えるよりも先に体が動いていた。

「さきっ！」
「ぐずっ、ひっぐっ……。いっ、ちゃん…？」
「まっててて！　すぐにいくからっ」

必死で幹にしがみつく。腕がぷるぷる震えていたけど、この時の私

は涙を浮かべる咲希の姿しか眼中になかった。
丈夫そうな枝に跨る彼女の手を掴もうと限界まで腕を伸ばす。咲希もまた、怖い気持ちをぐっと堪えて私との距離を詰めてくる。お互いの指先はもうほとんど触れられそうな位置にあった。

あと少しで届く…！　そう確信した瞬間、

「――――あっ…」

「「いちか／いっ（ちゃん）！」」

ふわっとした感覚が体を包み込む。咲希の表情に希望の色が見えた途端、安心して思わず力が抜けてしまった。
咲希たちの悲鳴が聞こえる…。私はそこでようやく、自分が木から真っ逆様に落ちているのだと気づいた。
……けれど、もうどうすることもできない。重力に従い、いずれ訪れるであろう衝撃を待つことしか何も――

ヒュッ

「おっと危ない。高いところにいる時は決して気を抜いてはいけませんよ。可愛いらしいお顔に傷が付いてしまいます」
「ふえっ？」

ドヒュンッと、一陣の突風が頬を撫でた。
すると浮遊感は霧散し、代わりにぶによぶによとした柔らかい感触と優しい抱っこの温もりが私を受け止める。本当に一瞬の出来事…。私たちが呆気に取られる中、辺りには「ヌルフフフフ」という個性的な笑い声だけが響いていた。

☆

「はい、よいしょ。二人ともお怪我はありませんか」
「あ、えっと…けがしてない、です」
「それは何より」

無事に私と咲希を降ろしてくれたその人は、私たちよりもずっと背が高くてとても綺麗な丸顔をしていた。腕の関節がやたら曖昧なのがすこし不気味だけど、せめてお礼は言わなきゃと…勇気を振り絞る。

「あ、あの。ありがとうございましちゃ……／／」
「ヌルフフフ。ええ、どういたしまして。しっかりと感謝の言葉を伝えられて偉いですね」ナデナデ
「わ」

なんて不思議な撫で心地だろう。手つきもすごく滑(ナメ)らかで気持ちがいい。
咲希も元気いっぱいの「ありがとう！」を伝えると私と同じように頭を撫でられ、嬉しそうに目を細めていた。

「でもねぇ…君たちの今の年齢を考えると、この高さの木に登るのは些か危険です。今後はこのような無茶をしないよう、十分に気をつけてください」
「うぅ…」シュン

当然と言えば当然だけど、危うく怪我をしかけたのは事実なので褒められた後にきっちりと注意されてしまった。
あからさまに落ち込む私たち…。それを見たおじさん（？）の大きな手が、私たちの小さい肩にふんわりとかけられる。

「木登り自体がダメなわけではない。大事なのは今の自分にできることをしっかり理解することです。
……例えば、アレなんかどうでしょう」
「「「？」」」
「こちらの木よりも背が低く、足場となる枝同士の間隔も比較的に小さい。しかも、あの枝々は程よい頑丈さとしなやかさをも両立させている。君たちの遊び場にはもってこいです」
「え、と」
「さあ！　先生がしっかりがっちり見守っておくので思う存分遊びましょう。そちらの二人も遠慮なんてい～りませんよ！」
「「「え…えええ!!」」」

☆

１０分後。

「ほなちゃんこっちこっち！」
「まて～！」

自称　〝せんせー〟　に催促された私たちは木登りを目一杯楽しんでいた。大きなせんせーが話した通り、枝に足を引っ掛けやすいから、この木全体が絶妙な難易度に出来上がっていてすごくおもしろい。まるで天然のジャングルジムのようだ。

「どうですか？　自分たちの力で存分に遊べる気分は」
「さいこうー！」
「うん…たのしいっ」

もちろんちょっとした高さがあるからおっかないけど、それ以上の

達成感とわくわく感でさほど気にはならない。咲希だけでなく、最初はあまり乗り気じゃなかった穂波や志歩も心から楽しんでいる姿を見て、思わず笑みが溢れた。

「せんせーはだいじょうぶなんですか？　なにかようじがあったらたいへんなんじゃ…」

「ああ、私に関してはお構いなく。ちょうどお買い物も済ませて暇でしたので、君たちが怪我をしないよう見守ることは吝かではありません」

ふと気になった疑問をおそるおそる尋ねてみる。何かしらの仕事の途中だったならすごい迷惑をかけてしまってるんじゃないかと心配だったけど、本人の口からその可能性は否定された。

…ということは、せんせーが手に提げている紙袋はその買い物の戦利品なんだろう。

「へ～、せんせーなにかったの？」

「初音ミクのCDアルバムです。生徒たちが全然遊びに来てくれない寂しさを紛らわすために買いました。品揃え豊富なシブヤのレコードショップは目当ての商品がすごく見つけやすくて――」

「「あ…」」

「にゅ？」

バッ！「どのくりえいたーがつくったきょく？　そのきょくをえらんだりゆうは？　ミクのどんなところがすきなの？　おしえてせんせー！」ギンギン

「にゅやっ!!　じゅ、順を追って説明しますから落ち着いて!?　そんな不安定な体勢じゃ流石に落ちますって！」

…と、私は同じ失敗を犯しそうになり、またしても怒られるので

あった。さっきよりもお説教の時間が長かったのはきっと気のせいじゃないと思う。

☆

それから色々質問しまくった結果、せんせーは自分の教え子の薦めでミクを知ったことがわかった。二次元の萌えキャラを熟知している生徒、二次元を住まいとする（？）生徒からの情報を元に、自ら進んでボカロの沼にハマっていったのだとか。

「初めは機械的で無機質な声音に慣れませんでしたがねぇ…何度も聴いていくうちに、ボカロでしか得られない独特の魅力に心を動かされたんです」

「うんうん、わかる！　わたしもミクのうたごえ、だいすきだからっ」キラキラ

ありったけの自信と共に、そう宣言したところでふと思い出す。

「とくべつだよ！」と、今の今まで私がミクのうんちくをかなり一方的に披露してしまったこと。辟易する素振りも見せず…ずっと私のペースに合わせて、せんせーが話を聞いてくれていたことを。

「あっ。……ごめんなさい、わたしミクのことになるとついむちゅうになっちゃって…」

「いえいえ、謝ることなど何もありません。むしろ、さらなるミクの魅力に気づけた私の方が感謝したいくらいです。…君の〝初音ミク〟が好きだという想い、しっかりと伝わりましたよ」

つぶらな瞳を細め、せんせーは穏やかに心の内を明かしてくれる。それならいいかな…と、私も後ろめたい気持ちを捨て去った。

存分に話し込んだ余韻が、ギターの音色のように残り続ける。自分の『大好き』が伝わった喜びで体が飛び跳ねそうになるけど、それよ

りも早くせんせーは立ち上がった。いかにもわくわくしていますと言いたげな表情(かお)で。

「そのお礼になるかはわかりませんが、私も君たちの遊びに混ぜさせてはもらえないでしょうか？　さっきも話した通り、いかんせん暇で暇でしょうがないんです…」

「えっ。いっしょにあそぶくらいなら……――いいよね？　みんな」

「「うん！」」

「うん。わたしもいいとおもう」

満場一致でオッケーだった。そして、その答えを聞いたせんせーのテンションはさらにさらに高くなる。私たちもそれに同調したのもあって、もう誰にも彼を止められそうにはない。

「ヌルフフフ、ありがとうございます。

となれば、先生も久々に本気を出すとしますかねぇ…！」ギラン

――遊び心に火のついたせんせーの暴走(茶番劇)が今、始まろうとしていた…。

☆

「〝けんけんぱ〟…ですか。話には聞いていましたが、これを遊ぶのは初めてです」

「え？　そうなのせんせー」

「はい。それに足場の輪っかも私が踏む分には少々ギリギリかもしれない。

…駄菓子(だがし)菓子(かし)！　マッハ２０のスピードを会得している先生にとって、この程度のギミックは恐るるに足らず。とくとご覧なさい、

世界最速の　〝けんけんぱ〟　を！」
「「「……」」」ゴクリ
「はああっ……！」

「ア、ケンケンパ！ケンケンパ！ケンケ――――にゅやっ!?」ツルン！
ズテン！

「「「……は？」」」

殺せんせーの弱点　①
カッコつけるとボロが出る
殺せんせーの弱点　☒
触手が多すぎ（太すぎ）て　〝けんけんぱ〟　が出来ない

「恥ずかしい恥ずかしい…超超超恥ずかしい／／／」
「「「……」」」

～～～～～

「「「にーらめっこしましょ♪　わらうとまけよ♪　あっぷっぷ――」」」

「（　☒―☒　）スン」

「「「ぶっほぉぉｗｗ（まがおうっすっっ！）」」」

～～～～～

「お次は　〝ながなわ〟　です。縄の回ってくるタイミングをうまく見計らって入りましょう」
ヒュンッ　ヒュンッ
(((なんかあのなわ、せんせーのそでからちょくせつのびてるような…)))

☆

2時間後。

「いやぁ遊んだ遊んだ。…それにしても、〝あそび〟というのは奥が深くて実に面白いですねぇ」
「え～まっさかー。せんせーうそついてるでしょ？」
「いいえ。『子どもは〝あそび〟の中で〝学んで〟ゆく』のだと、とてもいい勉強になりました」

『遊びの中で学ぶ』…どう言う意味だろう。疑問に感じていると、せんせーは話を続ける。

「先ほどのながなわが正(まさ)しくそうです。私が何も言わずとも…君たちは自ら順番やルールをつくって、楽しく遊んでいました。
『社会性や決まりを守る大切さを〝あそび〟を通して理解する』。――それを身に沁みて実感しました」

「…せんせーにもしらないことってあるんだね」
「ええ。ですが、これでまた先生は一つ賢くなれました。他でもない君たちのおかげでね」

思わず体がこそばゆくなる。まさか一緒に遊んだだけでこんなに

もお礼を言われるとは思ってもみなかったから。
…すると、そのむずがゆい感覚とはまた別に、からっ風がぴゅうと吹きつけ温まった私たちの体を冷まそうとする。悪戯な風がやってきた方角では、太陽が茜色に輝きながら少しずつ傾き始めていた。

「今日はみなさんと過ごせて本当に楽しかった。これなら、心にぽっかり空いた寂しさも乗り越えられそうな気がします」
「あ、そっか。たしかせんせー…せいとさんとあえてないからさびしいんだっけ。じぶんからあいにいくっていうのはダメなの？」
「ダメです」

即答。
咲希の問いに対し間髪を入れずそう答えたせんせーの表情には、一片の迷いも無かった。

「彼らは今、冬休みの宿題を解いています。こればかりは生徒たちが自分の力で答えを出さなくてはなりません。
――だから。どんなに寂しくても、先生は我慢して…彼らを信じて待ち続けるんです」

ふぅと小さく一息。一番星を見上げながら話すせんせーの表情は、とても優しかった。こんなにせんせーに信頼されている生徒さんっていうのも、なんだか気になるな…。

「変な話に付き合わせてしまってすみません。さあ、冬の日の入りは早いですから、そろそろお家へ帰りましょう」
「ええ～、もっとあそびたいのになあ」
「もう、さきちゃんたら…」
「その気持ちはわかります。ですが、楽しい時間がすぐに終わってしまうのは仕方がありませんよ」
「はーい」

「――あの」
「？」
「またこんど、あえますか？　きょうみたくわたしたちといっしょにあそんでくれますか？」
「！　……ええ。またいつか、会えるといいですねぇ」
「うん！」

――今となっては少し後悔している。もっとちゃんとした約束をしたり、指切りで念を押したりするべきだったな、と。
その後の「さようなら」の挨拶が、私たちが最後に交わした言葉だったから。

あの日以来、不思議なせんせーとは一度も会えていない。

◆◇◆◇◆◇◆◇

宮益坂女子学園　校門前。

「――っていう…懐かしい夢を見たんだ」
「おお～！　それってあの大きいせんせーのことだよね。アタシも覚えてる！」
「一歌ちゃん、もしかしてその先生のことが恋しくなっちゃったの？」
「ち、ちがうって！　純粋に優しい人だったから、もう一度会いたいなって思っただけで…」

穂波に揶揄われて、頬が茹でダコのように熱くなっていく。朝の登校時間は、人が多くて恥ずかしいから勘弁してほしい…。

「ふふ。きっとあの人今もちゃんと先生してるだろうし、またどこかで会えるよ」
「そう、だよね。…会えたらいいなあ」

夢で見た光景と実際の思い出とを頭の中でぼんやり重ね合わせていると、校門前に響く快活な挨拶にはっとする。そっか…今日の挨拶運動を担当してるの、渚先生なんだ。

「「「おはようございます！」」」
「おはよう、みんな。今日も一日頑張ろうね」

――間違える時もすれ違う時も沢山ある。
それでも…私たちは大事な記憶（大切思い出）を胸に今日という人生の一ページを刻み続ける。想いと夢を詰め込んだ蕾が綺麗に花を開（ひら）けるように。

相談の時間

月明かりが注ぎ、夜風が大分涼しくなってきた頃。
勤務時間内に始末できなかった資料をまとめながらふと考える。クラスの生徒それぞれの成績や生活態度を記したそれは、僕が四苦八苦しながらも宮女での教員生活に勤しんできた証なのだと。
根がいい子ばかりなのもあって手を焼かされる場面は少なく、むしろそのフレンドリーな雰囲気に助けられた覚えさえする。勉強に限った話ではない。行事や指導においても、僕という人間を拒まずに受け入れてくれたみんなには本当に感謝しかない。

――ただ一つ。悩みのタネがあるとするなら、

「(朝比奈さんだよなあ…)」

…もうじきこの学園へ赴任してから三ヶ月半が経とうとしているのに、未だ核心には迫れずだ。いい加減もどかしくもなってくる。

それでも、一応収穫はあった。
先日の文化祭で宵崎さんと絵名さん、暁山さんと話す彼女の心が僅かに動いていたのを…僕は見逃さなかった。普段の波長との違いからして、あの三人が朝比奈さんにとって特別な存在であることは明白だ。きっと難しいだろうけど、彼女たちとも話を出来たらと思う。

まるで〝難攻不落の要塞〟みたいだと、素直に考えてしまった…。

堅実に外堀を埋めていかなければ、現状つけ入る隙は全く無い。この難題をどう攻略するべきか…頭をうんうん唸らせていると、ベッド

の上に乱暴に放っておいたスマホから着信音が鳴り響く。
こんな夜遅くに誰だろう…？　疑問に思いながらも画面を覗き込む。えっと、相手は――

「！」

意外な人物が画面に表示されていて、脳内を侵食しつつあった眠気が吹き飛んでしまった。同時に込み上げるのはなんとも言えない気まずさ。丁重かつ穏便に断っているとはいえ、彼の厚意を無下にしていることには変わりないため…正直気が引ける。

――…いや、アドバイスも貰ったりしてお世話になってるんだから、ちゃんと失礼の無いようにしないと。
そんな考えが過り、僕は緊張を抑えて静かに応答ボタンに触れた。

『やあ。久しぶりだね、渚くん。こんな夜分遅くに電話をかけてすまない』
「いえ、お気になさらず。浅野先生もお元気そうで何よりです」

浅野學峯。かつての殺せんせーの好敵手（ライバル）であり、僕が尊敬する教師の一人。
彼から話を持ちかけられる時は大抵が私塾への勧誘（スカウト）であるため、今回もそれを断る気構えを持っておく。されど、僕は浅野先生が壮健であることを心から喜んだ。

――だが。今この瞬間（とき）、僕は夢にも思わなかった。まさかこれがきっかけで　〝真実〟　を知ることになろうとは。

◆◇◆◇◆◇◆◇

後日　ファミリーレストラン。

「わざわざシブヤまで来て頂いてありがとうございます、浅野先生」
「なに…私から頼んだことだ。折角承諾してくれた君に苦労をかけさせるのは申し訳が立たない」
「申し訳なんて、そんなことありませんよ」

僕がにこやかに微笑み返せば、浅野先生もふっと落ち着いた笑みを見せてくれる。僕たち二人を囲う空気はいつもより平和なものだった。

…それもそのはず。今日は単なる食事会をしに来ただけで僕を塾講師として迎え入れるためのお誘いではない。思わぬ内容に少し拍子抜けしたけど、それでも断る理由は無かったから僕はそれを快諾――今に至るというわけだ。

「それにしても浅野先生から相談なんて珍しいですね。てっきりフェイントで勧誘してくるものかと思ってました」
「……私がそこまで信用ならないのかい？」
「中学三年の時はいろいろとお世話になりましたから。決して信用していないわけじゃないんですけど、それ以上に用心深くなってしまうというか」
「はは。君も随分と口が達者になったようだ」
「…す、すみません」
「いや、謝罪は不要さ。むしろ変に畏って話されるより気分がいい。私の下（しもb）――部下たちは常にへりくだった態度しか取らないものだからね」
「（うん…そういうところが原因だと思う）」

未だに支配者らしい思考を残してるけど、あの頃と比べれば明らかに人間性は丸くなっている。それでいて教育に注ぐ情熱や超人的な手腕は一切衰えていないのがこの人の末恐ろしいところだ。『尊敬と畏怖の念を両方持っている』って言った方が正しいのかもしれない。

「さて。早速本題に入りたいところだが……」

「？」

「まずは食事がてら渚先生の近況報告を聞いてみようかな。散々私からの申し出をフッてくれてるんだから、これくらいは話してくれるだろう？」

全く…この先生には敵いっこない。拒否権は認めないと言わんばかりの不敵な笑みに対して、僕は内心呆れつつも了承の意を示すことしかできなかった。人ってやっぱり、根っこの部分は変わらないのかな。

ちなみに全く関係はないけど、こういったチェーンストアで食事をする機会が少ないからか…注文したデミグラスハンバーグに舌鼓を打つ浅野先生の姿は意外にも可愛らしかった。

☆

３０分後。

「なるほど。同学園の生徒のツテで、他校の生徒とも幾ばくか交流する機会に恵まれたと」

「は、はい…」

まずい。いらんとこまで話しすぎたかもしれない…。つい口を滑らせて、小豆沢さんや鳳さんたちと私生活（プライベート）で会ったことをバラしてしまった（そもそもそこまでの誘導が巧（うま）すぎた）。

変な思惑がないとはいえ『教師としての自覚が足りない』とか言われてしまったらどうしよう……。僕は返答が怖くてただただ縮こまっていた。すると、

「ふむ。本来は強く注意喚起をして然るべきだが…」

「…っ！」ビクッ

「君の献身的な姿勢は、極楽高校で教鞭を振るっていた頃となんら変わりない。校外でその生徒たちと出会った時もほとんど無意識に教師としての本能が働いたと見える。決して意図したものではないようだし、私からは何も咎めないよ」

「…え？」

まさかの言葉に、拍子抜けを通り越して僕は固まった。鋭すぎる正論と共に凍てつくような視線も喰らう覚悟を決めていたのに、まさかのお咎め無しだなんて…。

「私は君のそういう一面を買っているんだ。ここでそれについて叱ってしまえば、潮田　渚という優れた教師を他でもない私自身が否定することになる」

「！」

「まあただ、私とて一介のベテラン教師だ。一つ忠告はしておこう。…『過ぎた善意は己の身を滅ぼしかねない』――生徒の力になろうと努力する。大いに結構。…だが、人は己の技量と器に見合った仕事量しかこなせないことも忘れないように」

「……はい」

「素直でよろしい」

そう言うと浅野先生は少し満足げに笑みを溢した。その間(かん)、僕も今

の自分の在り方について考えさせられる。
彼からもらった言葉を強く噛み締めていると、ソフトドリンクを飲んで唇と喉を潤わせた先生が再び僕に向き直った。
「さあ、ここからが本題だ。余計な前置きは無しにして…君に率直に聞くとしよう」
いよいよか…。僕は固唾を飲み込む。
店内の喧騒が聞き取れなくなるくらい意識を研ぎ澄ませて、次の言葉を待った。

「朝比奈　まふゆという生徒を、知っているね？」
その口振りは質問というより確認に近かった。
浅野先生（この人）は朝比奈まふゆを知っている…そう思わせるだけの絶対的な自信を感じ取った瞬間、僕は疑問をぶつけるよりも先に肯定の意を示していた。
「――はい。僕が担任を務めるクラスの生徒です」
「では、君から見て朝比奈さんはどういう生徒なのか…教えてくれるかな？」
続け様に問いを投げかけられるが、僕は少しも怯まなかった。良いところも悪いところも…それらを全て引っくるめた生徒の個性を分からずして、教師なんて名乗れるわけがないと。

「彼女――朝比奈さんは、他人を思いやることができる優しい生徒だと思っています。勉学や部活動での大会においても非常に優秀な成績を収めていますし、ほとんど非の打ち所がありません。

……一方で、彼女は常に精神（こころ）が不安定な状態の生徒でもあります。ふとした瞬間に消えて失くなってしまいそうなほどに。

なので、その問題さえ乗り越えられれば彼女のさらなる健全な成長が見込めるはずだと、僕は確信しています」

「……」

僕がそう言い終えると、浅野先生は熟考するために押し黙った。…正直このタイミングで場が静寂に包まれるのは心臓に悪い。

さては僕が抱いている朝比奈さんへの印象が気に食わなかったのではないか…。なんて心配をし始めたところで、

「うん。君の正直な意見に感謝する。私も…彼女は見捨てるには惜しい生徒だと思っているよ」

…よくわからないけど、どうやら共感してもらえたようだ。肩の力が抜けてしまい思わず姿勢を崩しそうになる。

それに加えて今は区切りがいい。先ほど浮上しかけた疑問について思いきって尋ねてみた。

「あの…浅野先生、あなたが朝比奈さんを知っている理由は一体？」

「？　――ああ、そういえば話していなかったね。彼女は我が浅野塾の生徒の一人なんだ。君が驚くのも無理はない」

「は、はあ……

――――え、っ!?」

初耳なんだけど!?　条件反射でそうツッコミそうになるのを必死に抑えたら、代わりに変な声が出てしまった。

「ちなみに…いつ頃から塾へ通ってるんです？」
「新学期が始まるより前、春休みの半ばに入塾してきたよ」
「僕の赴任とほとんど同じ時期!?　し、知らなかったぁ…」

それなら浅野先生が僕と朝比奈さんの関係性を知っているのも納得だ。朝比奈さんが僕の情報をぽろっとこぼしてしまったか、浅野先生が彼女から巧みに聞き出したかの二択になるけど、これ以上踏み込んでも今さら意味が無い気がしたので諦める。

「――――何度も驚かせておいてなんだが、まだこの本題（はなし）には続きがある。聞いて欲しい」
「っ…」

刹那、浅野先生の視線の鋭さが増した。
…今度はそれに嫌悪らしき感情が込められており、睨みを効かせるだけで人を殺せてしまいそうだ。だから僕も、激しすぎる温度差に僅かに翻弄されつつも至って真剣な態度を取ることで彼の言葉に応えた。
すると、固く閉ざした口を重々しく開いて浅野先生は語り出す。

「朝比奈さんが抱える『心の問題』…その原因について君は何か知っているかな？」
「いえ、見当は付いてるんですけど、実はわからなくて……」

――――っ！　まさか…！」
「ああ。君の見立て通り、私は既に知っている」

皆まで言わずとも気付いた。そうでなければ…わざわざこんな回

りくどい言い方はしないだろうと。
しかし、この食い付きっぷりは想定の範囲内だったのか、答えを急かす僕を宥めるように先生は続ける。
「ふむ。すぐに教えてもいいのだが、君が立てた予想というのも気になるね。ここは一つ、〝答え合わせ〟といこうじゃないか」
「ええ……？」

悲しいかな、この人が何をしたいのか嫌でも想像できてしまった…。
この期に及んで僕を試そうとしているのだろう。教師としての観察眼が腐っていないか否かを。
…それにもう視線が「早く喋れ」って訴えかけてるんだもん。最早新手のパワハラである。――いやまあ、ちゃんと話すけども。
「…あくまで推測の域を出ませんが、朝比奈さんを苦しめる原因は対人関係にあるものと考えています。それも、友人同士でのトラブルや教師との不和なんかよりも…ずっとずっと重度な原因であると」
「ほう」

生徒から聞き出した…朝比奈さんの優等生ムーブが定着し始めたおおよその時期、友達と過ごす中で（僅かながらも）時折本当の笑顔を浮かべる事実、そして…ご家庭の話題を上げた時必ずといっていいほど激しく乱れる波長。
「――それら全ての情報から考えた末に辿り着いたのは、朝比奈さんのご家族が彼女を歪めてしまった可能性です。ちがいますか？」
沈黙。
また微妙に居た堪れない雰囲気になるのかと思われたが、浅野先生がくつくつと笑い出したことで早くも静寂は破られる。

「くっ、ふふふふ…。いやあ、私の想像していた以上だ。やはり君という教師は実に素晴らしい」
「と、いうことは――」

「君の推測は的を射ている。
……そう、朝比奈まふゆの心を束縛しているのは他でもない彼女の母親だ。恐らく父親の方も同罪だろう」

そう言うと浅野先生の表情は再び険しくなった。対する僕も、きっと同じ表情を浮かべているのだろう…。
……そこに大きな驚きはなかった。心のどこかでは『どうか間違いであってくれ』と望んでいながら、これこそ決定的な見解であると確信していたから。
とは言え、決してショックを受けなかったわけではない。僅かな希望が完全に潰えてしまったこの絶望感もひとしおだ。

「さあ。これでようやく、今後の方針について話し合えるね」
「今後の方針？」
「いかにも、今日の相談の肝がそれだ」

いわゆる作戦会議のようなものなのだろう。このまま朝比奈さんを苦しみの沼に放置させ続けるか、あるいは現状から脱出させるべきかを決めるための。
「……あの、朝比奈さんのお母様がどういう人物なのか知らないのでそろそろ教えてもらってもいいですか？」

流石に何の情報も無くては戦略なんて立てようがない。

「…厳しい現実を突きつけてしまうが、君が知っておくに越したことはないな。わかった、話そう」

…と、浅野先生の目が据わった途端、今日一番のおっかない表情へと様変わりした。

「アレは最早母親と呼ぶに値しない。あそこまで清々しく…無自覚で人の心を傷付けられるのは、一つの才能なのではないかと感じたね」

「ヒエッ…」

腹の中でぐつぐつと煮込まれた怒りや絶対に相容れないと言わんばかりの嫌悪を少しも隠そうとせず、彼は言った。相当鬱憤が溜まっていたのだろう…未だ興奮冷めやらぬという状態だ。

「入塾の面接時、朝比奈さんも交えて小一時間ほど話をしたんだ。彼女は既に予備校に通っていたそうだが、塾と掛け持ちするにあたり至極真っ当な理由を提示されたので私も特に口は挟まなかった。

――だが、話せば話すほど…母親の異常性が浮き彫りになってきてね。『自分と娘はまさに以心伝心である』と公言した上で、一方的に話を続けたのさ。朝比奈さんが意見する猶予も与えず」

「……」

「口では最上級の理想（医者になる夢）を掲げていたが、あれは完全に朝比奈さんの意志を度外視している。加えて、私が納得もしくは共感し得（う）る具体的な教育方針の一つさえ持っていない。

同じ子持ちの親である私からすれば、彼女は教育者としても母親としても三流以下。最底辺に位置する存在だと断言していい」

…僕は怒涛の罵倒ラッシュにただただ圧倒されるばかりだった。話を聞く限り擁護できる点が一つも見受けられず、どのように意見す

ればいいのかも正直わからない。
　そんな僕の戸惑いを知ってか知らずか、浅野先生はさらなる爆弾を投下する。
「……最悪証拠が揃い次第、私はこれを児相に掛け合っていいものと捉えている」
「え？」
「これは児童虐待の根源にあたる心理的虐待だ。２０００年施行の『児童虐待の防止等に関する法律』で漏れなく定義されているのは、君も知っているだろう？」
「それは、そうですけど…」
　果たしてそれが最善なのだろうか？
　結果的に朝比奈さんが母親の呪縛から解き放たれたとしても、彼女を真に救えたことになるのか？
　疑問は尽きない…。自分が望む未来が見えない…。でなければ、彼女の力になる方法さえも思いつかない…。
　…なら自分は、せんせーに何をしてもらったのか。そんな考えが頭を過る。
　――そうだ、簡単なことじゃないか。
「浅野先生」
「なんだい？」
「朝比奈さんの件は、僕に全面的に任せてくれませんか」
「……理由を聞こう」

「はい。僕は――朝比奈家が本当に笑い合えるようになってほしいと、今の話を聞いて気付いたんです。
朝比奈さんのお母様が自身の過ちを自覚し、朝比奈さんと正面から向き合うことが最も大切ですが…それだけでは足りません。朝比奈さん自身も、その変化に耐え得る強い心を持っている必要があります。
だから、お母様を悪と決めつけたりどちらか一方に変化を強要したりするのではなく、両者の心に寄り添いお互いを正しい方向へと導いていくべきです。
……まだ浅野先生のように具体的な解決策も豊富な経験も持ち合わせていませんが、どうか…僕にやらせてください」

これが今の自分にできる精一杯だった。
叶うはずのない夢物語だと揶揄されてもいい。せめて少しでも彼の心に響いてくれれば、それで――

「顔を上げなさい、渚くん」
「…」

黙って顔を上げるも、なかなか浅野先生の顔を直視できない…。僕は無意識に返答を恐れていた。
けれど、

「――――君の意志はしかと受け止めた。茨の道へと進むその覚悟も。
確かに理想論ではあるが、決して実現が不可能なわけでもない。私にできることがあればいつでも協力するよ」

返ってきたのはなんと肯定の意を示す言葉だった。加えて、こんな中身の無いすかすかな方針に協力までしてくれると言う。
彼らしからぬ意外な答えをにわかに信じられない僕は、思わず問い

質した。

「どうして僕と協力を…？」

「単純なことさ。朝比奈さんをより『強い生徒』に育てるには君が考える方針が最も適切であると、そう判断したに過ぎない。

それに…私は生徒を強くするのに長けてはいるが、生徒や保護者の心に寄り添うのは少々不得手なのでね。そこは渚くんに任せるとしよう」

苦手とか言ってるけど、あなたも大概やり手でしょうに…。

「何より――」

「？」

「君の真っ直ぐな眼差しが、彼とよく似ていた。それ以外に何か理由がいるとでも？」

「！　…いいえ。僕にとっては勿体ないお言葉です」

「ふふふ。期待しているよ」

「はい。ありがとうございます、浅野先生」

――この日、初めて僕はスタートラインに立つことができた。

例え道のりが遠く険しくとも…一度決めたことは最後まで貫き通すし、絶対に諦めたりしない。朝比奈さんが本当の笑顔を取り戻すまでは――

◆◇◆◇◆◇◆◇

センター街。

「（いつもより人、多いな…）」

絵名も瑞希も、同じファミリーレストランばかり行っていて飽きないのだろうか。私にはよくわからない。

「奏、平気？」

「うん、まふゆが引っ張ってくれてるからなんとか…」

ちょっと目を離すとすぐ人混みに揉まれてしまいそうな奏を気にしながら進んでいく。

…すると、前方への注意が散漫になった瞬間、私は通りの角から現れた人影を避けきれずぶつかってしまった。

「きゃっ」

「おっと。これは失礼……おや？　君は――」

ぶつかった人と目と目が合い、そこでようやく気が付いた。格好や髪型こそ違っているけど、この切れ長で何を考えているのかが読めない目は…間違いない。

「あ、浅野先生っ…！」

「こんにちは、朝比奈さん。今日はご友人と一緒にどこかへお出かけかな？」

っ……ダメだ。私が奏たちと一緒にいるのを、よりにもよってこの人に見られるなんて。これじゃいつお母さんに報告されてもおかしくない…。そんな可能性を考えた途端、急に頭が真っ白になった。

「やあ。はじめまして、こんにちは。私は、朝比奈さんが通う塾の塾長を務めている…浅野學峯です。どうぞよろしく」

「「ど、どうも」」

――――え？…

「せん、せい」

「？　どうしたんだい、朝比奈さん？　何より顔色が優れないようだが」

「なにも……言わないんですか」

もう質問がめちゃくちゃだった。けれど、要領を得ない…ただ単語を並べただけの片言にも関わらず、浅野先生は懇切丁寧に答えてくれた。

「――当然だよ。私が朝比奈さんの友人関係に口を挟む権利は無いからね」

「あの、お母さんには…」

「まさか。絶対に告げ口をするわけがない」

…とは言うものの、目を見ただけでは本心かどうかもわからず結局半信半疑のままだ…。奏たちとの関係を断ち切られるかもしれない恐怖に苛まれ、顔を少しだけ俯けていると、

「私にもついに強力な助っ人ができたのでね…これからは出し惜しみしないでいかせてもらうよ」

耳元で静かに、そう囁かれた。疑問に思って顔を上げるも、既に浅野先生は「さようなら、みなさん。良い休日を」と台詞を残して去ってしまっていた。

彼の後ろ姿が見えなくなるまで見届けてから、ふと考える。

「（もう……潮田先生も浅野先生も私の心を掻き乱してばっかりで、本当になんなのっ…！）」

この行き場のない感情は打ち上げの会場に着いてもなお収まることはなかった。それをみんなに相談したら、なぜか生暖かい視線を送られたし……本当に、今日はわからないことだらけでうんざりだ。

名人の時間

『あはは！　司くんたら、また類くんの実験に巻き込まれて爆発したの？』
「はい…。学校であれやられるの恥ずかしいし、あかりさんからもやめるよう言ってくださいよ。司の場合、吹っ飛ばされる度に大声で叫ぶので騒音も倍近くうるさいんです」
『何それ、新手のテロ？』

静かな夜を、小さくも賑やかな笑い声が彩る。
いつもこの時間帯は台本に目を通したり対戦ゲームに挑んだりしてるけど、今日はそれらを全部パスして…雪村　あかりさんとの雑談に花を咲かせていた。お互い　〝役を演じる〟　ことの難しさや達成感を共有できる相手だからこそ、遠慮なく気軽に話し合える。
……言わなくてもわかるだろうけど、私は彼女のコミュ力に後押し（助け）されたおかげで、今こんなにも自然体で話せてると言っても過言じゃない。というか、この私が嬉々として尊敬している有名人に会話をふっかけられると思う？　人見知り舐めんな。
今は画面越しで話してるだけだけど、時折えむも連れて遊びに行くこともあるから、あかりさんには本当に良くしてもらっている。『あかり』という彼女の本名もその時教えてもらったので、以降はその名前で呼んでいる。
曰く、「『茅野　カエデ』も『雪村　あかり』も…どちらも等しく〝私〟　なの。だから、寧々ちゃんとえむちゃんが好きな方の名前で呼んでくれていいからね」と。そう言った直後に彼女が浮かべた恋する乙女のような表情は今でも忘れられない。

『どしたの寧々ちゃん？』
「あかりさんが早く彼氏とくっついたらいいのにって思っただけで

す」

『んなっ!?／／／』

欠点無しの凄腕女優は、きっとプライベートでも毅然とした雰囲気を崩すことはないんだろうと思っていた。

…けれど実際に蓋を開けてみれば、大人の女性とは思えないほど『恋愛』に疎く（というより奥手で）、それについて恥ずかしがる姿がなんとも可愛らしい人だった。

今にして思うと…私たちが初めて出会ったあの日。あかりさんが勇気を振り絞ってくれなければ、こうして彼女の意外な一面を知ることもできなかったことだろう。そう考えるとちょっと感慨深い。

そして件のあかりさんはというと、動揺しているのがバレバレな声で『か、彼氏なんていないもん！　揶揄わないで！／／』と、必死に抗議している真っ最中。彼女の気が済むまでしばらく会話の主導権を握らせておいたら、次第に疲れた声へと変わっていってついに抗議の勢いは収まった。

『ゼェゼェ……。次の日曜覚えときな、寧々ちゃん。絶対にボコボコにしてあげるから…！』

「フッ…またゲームで勝負をすると？　通算十三連敗もしてるっていうのに全然懲りませんね、あかりさ――」

『私の友達が！』

「――ん……ん？　は？」

◆◇◆◇◆◇◆◇

日曜日　センター街。

「あかりさんのお友だちも来てくれるなんて楽しみだね、寧々ちゃん！」
「いやいや待って待って」
「どんなお友だちなんだろ～。やっぱりあかりさんと同じくらい素敵な人なのかな？」
「話聞いて？」

色々と展開がおかしい。もともと日曜はまたどっか遊びに行こうか～的な軽いノリでいたのに……！
あかりさんが連れてくるという友達と会うのはともかく、初対面でいきなり『ゲームしましょう^　^』って流れはやっぱり解せない。もっとこう…親交を深めてからそういうことするんじゃないの？
それとも、私が人付き合い苦手なだけでこれが普通なの？
思わずえむに聞いてしまった。

「一緒に好きなことたくさんやってわんだほいしちゃえば、どんなひとでもきっとすぐに仲良くなれると思うな！」
「答えになってないよ……でも、ありがとね」
「うん！」

変な先入観をなくして臆さず突っ込むのが一番いいってことだろう、多分。そもそもの話…相手方がゲームをするのに興味が無ければ、こんなところで待ち合わせなんてしていない。
私が神経質なだけか…。そう気持ちを切り替えた矢先、すぐそこで見覚えのある緑色の髪がふわりと揺れた。

「寧々ちゃんー、えむちゃんー」
「あ、来た！　おーい！」
「こんにちは」

眩しいくらいの美人オーラを振り撒きながら私たちの名前を呼ぶ

あかりさん。そんな彼女の隣にはもう一人…大和撫子な佇まいを見せる絶世の美女が並んでいた。
背中の半ばまで伸びる艶々しい黒髪は、まるで日本人女性の魅力がこれでもかと詰め込まれているようだった。あかりさんとはまた異なるタイプの『大人の女性』を前にして、私は言葉を失ってしまう。

「初めまして、神崎　有希子といいます。今日はよろしくね」ニコッ
「あ――えと、草薙　寧々…です」
「はじめまして！　あたし、鳳　えむです！」
「まあ。ふふ、元気いっぱいだね」

軽めの自己紹介を終えると、あかりさんが彼女…神崎　有希子さんについて少しだけ情報を付け加えてくれる。
なんでも二人は中学時代からの付き合いだそうで、大人になった今でも他の同級生たちと交流する機会を設けているという。
…とても強固な交友関係だ。渚さんといい神崎さんといい、一体あかりさんがどんな中学校生活を送ってきたのか気にならないでもなかったけど、特に追求をしようとは思わなかった。今日の主旨はあくまで『ゲームで遊んで親睦を深める』ことだし、何より…あかりさんたちの世界に土足で踏み込むのは本意じゃない。
なんて考えていると、神崎さんの淑やかな微笑に僅かに心配の色が浮かんだ。

「茅野さん。言い忘れてたけど…実は私、ゲーセンに来るのはかなり久しぶりなの。もし感覚が鈍っていたらごめんね」
「ええっそうなの!?　むむむ、なら寧々ちゃんを完膚なきまで叩き潰すのは難しいか…」
「あっ、最初(ハナ)から他力本願なんですね」
「神崎名人の腕前を全面的に信頼してるって言ってよ」
「ええ……」

あかりさんが向ける謎の信頼に思わず困惑する。
それに、失礼なのは承知の上だけど……ゲームという娯楽とは全く無縁そうなこの人が、私の対戦相手になり得るとは正直考えにくかった。

「それじゃあ、神崎さんの肩慣らしとしてまずはクレーンゲームから回ってみよー！」
「おー！」

――まだこの時は。
『肩慣らしをしたところでブランクがあるのなら大して変わらないだろう』と高を括っていた私は、後々とんでもない光景を見せられることを一ミリも予測できないまま…ゲームセンター（今日の戦場）へと足を運ぶのだった。

☆

本来なら和気藹々と、勝敗に一喜一憂しながら、多種多様なゲームに挑戦できる天国のようなこの場所に――　一人の鬼が舞い込んだ。
……全部私の主観だけど、それ以外の言葉では現在の状況について言い表しようがない。本当に…圧巻だった。

ケース①　クレーンゲーム

「うーん、ちょうどこの辺りかな」ピッ
ガラガラガラ！
「へ？」
「おお～お菓子のタワーが崩れちゃった」
「ふふふ…」バサッ
「（ちゃんと景品用マイバック持参してる!?）」
「よかったらどうぞ。一人じゃとても食べ切れないから、幸せのお裾

分け」
「ほんと？　わーい！　ありがとう神崎さん！」
「（気配りも完璧だ!?）」

ケース②　音ゲー

「――――あらら、ＡＰ取れなかったか。残念」
「フ、フルコン取るだけでも鬼畜な楽曲なのに、さも同然のようにＡＰ圏内とか…」
「次の『Ｃｈａｌｌｅｎｇｅ』モードでＡＰ取れたら、久しぶりに『Ｈｅｌｌ』行ってみようかしら」
「え、っ!?」

ケース③　シューティングゲーム

「こういうレトロなゲームがシブヤでもまだまだ現役なのは知らなかったなぁ」シュパパパパ
「おお～相も変わらぬ腕前のようで」
「これどうやって避けてるの？」
「ふふふ。秘密♪」
「――――――」

……あらゆるゲームを難なく踏破してしまう実力を前に、私は深く絶望させられた。これらはまだデモンストレーションの一環であるという事実も見事に作用して。
あ。そういえば…この後直接対決する格ゲーも人並みに嗜んでるって話してたな――――
うん。オワッタカモ。

「はあああ～～……」
「どうしたの？　そんな大きなため息ついて。もしかして振り回しす

ぎて疲れちゃったかな」
「はい…。まあそんなところです」

店内の一角にある休憩席で無気力になっていると、神崎さんが缶ジュースを片手に私を心配しに来てくれた。「これで元気出して」と差し出されたそれを受け取りながら、遠目にえむとあかりさんを見遣る。

二人は今、小さな子どもたちをギャラリーに加えてぷよぷよのパズルゲームに挑戦している。えむが大連鎖を起こす度にぱあっと歓声が沸き起こり、あかりさんの悲鳴が耳をつんざく。…そんな微笑ましい光景に、思わずクスッと笑みが溢れた。

「茅野さんもえむちゃんも楽しそう」
「神崎さんは混ざらなくていいんですか？」
「ええ。私が今一番したいことは寧々ちゃんとお話することだから」
「そ、そうですか…」

うっ、笑顔が眩しい…。というか、そもそも顔面が強すぎる。

「二人はよくここに遊びに来るの？」
「行きつけのお店の一つって感じです。ここらへん、結構ゲームセンターが多いから日替わりでローテーションして回ってて」
「それで〝行きつけ〟なのね」
「はい。……少し前までは一人でひっそり楽しむだけだったけど、最近は隣にえむがいてくれるから楽しくもあって嬉しくもあります」
「――そう。私も、寧々ちゃんと同じだよ」

同じ…？　それは一体どういう意味なのかと疑問に思うと同時に、神崎さんはまるで昔の思い出を懐かしむような表情（かお）でゆっくりと話し始める。

「初めはいい肩書きや名門の制服から解放されたい一心で、誰にも悟られないよう格好も髪型も変えて一人っきりでゲームセンターに入り浸ってたの。あの時の私は、誰にも認められるはずがないってほとんど諦めていたから…。
けど、胸の中でつっかえていたしこりを私たちの先生がなくしてくれて…茅野さんが私のこんな一面を受け入れてくれて…本当に嬉しかった」
「！　――神崎さんは今の方が楽しいですか？」
「もちろん。ありのままの自分でいられる、この時間が一番好き」
そう話す神崎さんの瞳に、えむとの対戦で大敗を喫したあかりさんの姿が映る。
…確かに、私たちは似た者同士だ。友達と過ごす時間を大切に思う気持ちは全く同じなのだから。それによって距離感がぐっと近くなり、私と彼女の空気がふんわり和んだ――まさにその時。

「ちょっと！　いきなり何するの！」

明確な怒気を孕んだあかりさんの声が鋭く響く。
その口撃の矛先は、えむが子どもたちと代わりばんこで遊んでいた台に横から割り込んできた男性に向けられたものだった。トラブル発生を予感した私は神崎さんと顔を合わせて頷き、えむの元へ駆けつける。

「アンタらがずっとこの台占拠してるから、少し強引に奪っただけだ。文句ある？」
「大ありだよ！　ゲームを長い間使ってたのは謝るけど、やりたいならやりたいってちゃんと言ってくれれば譲ってあげたのに…」
「譲ってあげた？　そんな上から目線で物を言うような奴にお願いなんざごめんだね。順番無視して正解だったわ」

「っ！　君ねぇ…！」
「あれ？　〝順番〟？　お兄さん、ちゃんと並んで待ってなかったよね」
「そーだそーだ！　このおねえちゃんのいうとおりだぞ！」
「こんなのふこーへーだ！」
「……チッ、るっせぇなぁ」

口論の大まかな原因はなんとなく掴むことができた。よくある順番無視のパターンだが、これはほぼ１００パー向こうが悪い。ゲームをしたいなら順番は必ず守るべきだ。
確かにこの人は、チラチラと視線を向けいかにもぷよぷよをやりたそうにしていたけど、それでも他の台を転々としながら機をうかがっていただけで決して列には並んでいない。
えむと子どもたちに正論で返されて分が悪いと感じたのか、最後は悪態をつくだけに留まった。…だとてこんな横暴許しちゃいけない。私も一言言ってやろうと思ったが、それよりも早く神崎さんが動いていた。

「ちょっといいかしら？」

――目元に暗い影を落とし、背後に得体の知れない空気を纏わせながら。

「な、なんすか？」
「この子たちにちゃんと謝って、そしてもう一度列に並び直して。あなたが取った一連の行動は全て非倫理的で恥ずかしいものだわ。…せめて筋くらいは通しなさい」
「……ったく、わかったよ。すぐにでも謝ってやらぁ」

え、意外とあっさり？　にわかには信じられないけど、ともあれこ

れで解決してく――

「あのゲームでアンタが俺に勝てたらな」

…れると思ったのに、世の中そんなに甘くはなかった。そう言って男が指を指した先にはサバイバルゲームの筐体がでかでかと鎮座していた。つまり、神崎さんとあれで勝負するってこと？

「『負けた方の指示には絶対従う』ってルールだ。それでいいだろ」

「ちょっ、そんな条件…」

「受けて立つわ」

「えっ!?」

あまりに一方的すぎる決定に異議を唱えようとするが、神崎さんはそのハイリスクハイリターンな要求を二つ返事で了承してしまった。…驚きの声を上げる私を差し置いて、二人の間に火花が飛び散る。これ以上近づいたら火傷しそうなほどバチバチだ。

「決まりだな。なら早速――」

「殺(や)りましょうか」

…それでもやはり神崎さんは笑みを湛えている。

殺意(やる気)と自身に満ち満ちた笑顔を浮かべる彼女には、なぜか勝てる気がしなかった。

☆

筐体に入っていく二人を見届けて、私たちは傍に設置された小型スクリーンの前で勝負が始まる瞬間を今か今かと待ち続ける。神崎さんに限ってサバゲー未経験なんてことはないんだろうけど、対戦を持ちかけてくるあたり相手が相当の手練れであることは間違いない。

…不安な感情が一気に込み上げてくる。

「１ｏｎ１で闘(やる)うとなると、やっぱりどの地形で撃ち合うかで戦況が大きく変わってきそうだね。寧々ちゃんはこのゲームやったことある？」

「一応あります。『フィドバ』や『ブラックギャラクシーソルジャー』より若干モーションが粗大というか…小回りが効きづらかった記憶があるけど、ごくごく普通のサバイバルゲームって感じで。別に特筆してダメなシステムがあるわけじゃあないです」

「なるほどね。それならきっと大丈夫」

「？」

３、２、…――

カウントダウンの秒読みが始まった。私と対照的に、あかりさんの表情はなおも明るい。

１、Ｒｅａｄｙ　…――

「ガンシューとかサバゲーは神崎さんの超得意科目だもん」

Ｆｉｇｈｔ！

ズガガガガガガ！

あかりさんが自信ありげに話すと同時に吹き荒れる銃弾の嵐。リロードもほぼノータイムで行うスマートな立ち回りに、私の意識は釘付けになった。もちろん相手は武器を構えることすらできず、この清々しいまでの蹂躙劇はあっという間に終局を迎えた。

圧倒的すぎて言葉も出ない中、神崎さんは涼しい顔をして筐体から戻ってくる。

「どうだったかな？」

「すっごくかっこよかった！　ねえ、寧々ちゃん」

「う、うん。確かにすごかった。けど…神崎さんとは絶対にサバゲーしたくない。夢に出てきそうな怖さしてた」

「そこまで言われると傷つくのだけど」

「ざっけんな…！」

思い思いに神崎さんを褒めちぎっていると、たった今惨敗したばかりの男が悔しさで顔を歪ませながらこちらに迫ってくる。

「あんな勝ち方があってたまるか！　どうせチート使ったんじゃ――いいでででででで!!??」

「ふふふ♪　こんなところでオイタしちゃダメよ」

完全な逆恨みで手を出しそうになった彼を、目にも止まらぬスピードで押さえつける神崎さん。手首を軽く捻っているようにしか見えないけど、想像を絶する痛みなのがひしひしと伝わってくる。

…いや、第一護身術まで会得してるなんてすごいことだ。普段のショーとあかりさんの規格外っぷりに毒されてるせいで反応が少し遅れたけども。

「あなたの疑問にはっきりと答えてあげる。私の強さの秘訣はどんな人が相手でも絶対に手加減はしない、ただそれだけよ。例えそれが、お年寄りや初心者であったとしても…ね」

「お、鬼だ……」

「ん～～？」

「いっでででで!!」

痛みに悶える男性に向けて、神崎さんは堂々と言い放つ。私も全く同じことを思ったけど、それを呟くのは悪手だったようだ。彼にはさらなる追撃が加えられ、息もすっかり絶え絶えになっている。

「はいじゃあ約束通り、私の要求を聞いてもらおうかな」
「……」
「子どもたちと茅野さんとえむちゃんにちゃんと謝って仲直りしなさい。今すぐ」
「え」
「し・な・さ・い」ニコッ
「……っす」

さっきの気迫はどこ行った。

「ほ、本当に…すみませんでした」

「声、小さくない？」ニコッ
「誠に申し訳ありませんでしたっっ!!」

流石に満場一致で許された。
こんなプライドもずたずたにされちゃあ、誰だって同情したくもなる。

「これで万事解決ね。――さて、いいウォーミングアップにもなったところで…寧々ちゃん」
「(!?)」

「さっきも言った通り、本気で相手してあげる♪」
「ピャッ…」

結果は全戦全敗。
今後しばらくの目標が『打倒、神崎　有鬼子』となったのは言うまでもない。幸か不幸か…私の実力は神崎さんのお眼鏡に適ったらしく、連絡先を交換し（もちろんえむも）定期的に彼女と対戦することが決定した。
うん。ゲーム仲間ができたのは当然嬉しい。嬉しいのだが……
「（あの人は絶対怒らせないようにしよう）」
私は固く決心した。優雅なゲームライフを送るためにも何がなんでもこの教訓を忘れてはならない、と。

プロの時間・3時間目

教室のセカイ。

「〜〜〜♪　――――――！」

うん。少し尻すぼみになってたところ、ちゃんと演奏できてる。一歌の歌の調子も良好だ。

…ミクとルカに見守られながら、私はみんなが奏でる音色に耳を傾ける。聴く人の心を踊らせるような咲希のシンセ、優しさと芯の強さを併せ持った穂波のドラムも一歌の演奏に引けを取らない。

私も負けじとベースに意識を注ぐ。今いるステージからさらなる高みへと駆け上がっていくように。

「――――!!」

そして大きなミスをすることも、今日一番の勢いを衰えさせることもなく演奏が終了した。やりきった表情（かお）を浮かべる一歌が緊張をほぐすように一息つくと、ミクから称賛の拍手が送られる。

『みんな、今回の演奏すっごく良かったよ！　四人の想いがどんどん強く結びついてる証だね』

「ありがとうミク。…だけど、まだまだこれから。もっといい演奏ができるように頑張るから楽しみにしててよ」

『うん！』

ミクの言葉に、自分たちの確かな成長を実感する。一歌の言う通り改善の余地を残してはいるけど、次の演奏も頑張ろうと前向きになれる。気持ちいい形で終われた余韻も相まって、自然と頬が緩んだ。

「あっ！　しほちゃんが笑ってる。か～わいい♪」
「いやっ、別に笑ったりなんか……す、するし」
『あらあら』

　咲希の可愛い冗談にちょっぴり困りながらも、私は首を縦に振った。すると、普段と違うリアクションが意外だったのか、みんなはびっくりした表情で私の顔を見つめ返している。…なにさ。せっかくノリに便乗したっていうのに。
　「(失敬な)」と心の中で不満を垂れると、どこか納得した様子のルカさんが話しかけてきた。

『今日の演奏とその笑顔の柔らかさ、何か嬉しいことでもあったんじゃないかしら？　ねえ志歩』
「／／／……はい。実はルカさんの言う通りで」
『『おお～』』
「志歩ちゃんがそわそわしてたの、そういうわけだったんだね」
「え？　そんなにわかりやすかった？」
『『「「割とすごく」」』』
「うっ…」

　自分の顔がみるみる熱くなっていくのを感じる。けれど、私はすこぶる機嫌がいいからほとんど気になることはなかった。
　そこでふと思う――みんなあの店を気に入ってくれてるし、今誘ってみるのもアリなんじゃないか、って。
「ねえ。折角だから今度のオフ、四人で一杯（食べに）行かない？」
「「「（　!?　）」」」

「「「未成年飲酒はダメだよ！」」」

「断じて違うからっ……！」

◆◇◆◇◆◇◆◇

後日　東京都某所。

私はあの後自身の説明不足を反省し、『一杯』という数え方が指すお店について詳しく教えることでみんなの誤解を解消した。加えて、今日は三人ともバイトのシフトが入っていないからと、私に同行してくれている。

急なお誘いだったし断られても仕方がないかと思ってたけど、全員が即答でオッケーしてくれた時はとても嬉しかった。ただ――

「志歩？」

「いや。なんだか無理に誘ったみたいで申し訳ないなって…」

「もう！　しほちゃんってば今さらそんなことで心配してたの？　全くきな臭いな～」

「それを言うなら　〝水臭い〟　でしょ」

「あはは…。でも、志歩ちゃんが見つけたっていう松来軒の本家の味、わたしすっごく楽しみだよ」

穂波…。そっか、それなら別に遠慮なんてしなくてもいいかな。みんなのわくわくした表情を改めて見ることで心がすっと軽くなる。この後食べるラーメンが一層楽しみになってきた。

――今私たちがいるのは東京都　椚ヶ丘市。シブヤの真反対に位置する、至って平和なベットタウンだ。ここにはラーメン愛好家でもほんの一握りしか知らない穴場中の穴場、松来軒の本家が店を構えている。あの有名チェーン店の発祥の地ということでもっと多くの人に周知されていてもおかしくはないんだけど…ＳＮＳ上の口コミやつぶやき等は悉く誰かの手によって消去される。そのため、椚ヶ丘に

辿り着ける人自体がそもそも少ない。愛好家の知り合いに教えてもらわなければ、私もここへは来れなかった。

「！（見つけた…！）」

そして、最寄り駅から南に進み続けること早二十分。私たちはついにそのお店に到着した。

「（――ん？）」

けれど次の瞬間、私は足を止めて立ち尽くした。

よく見ると年季の入った看板はぼろぼろで、そこに刻まれる『松来軒』の文字もところどころ掠れていた。加えて、開店前にも関わらず店先に並ぶお客さんらしき姿は見当たらない。

ごくごく普通の個人経営店のようだけど、外観と相まってすごく寂しい感じがする…。

「…とりあえず待ってようか」

「「う、うん」」

一歌たちも同じことを思っていたのか、反応は少し薄かった。…無理もない。私も店と住所を間違えたんじゃないかと疑ったほどだし。

そんななんとも言えない空気が漂い始めた瞬間、扉の鍵が開く音がした。

すると中から、金髪で面長の男性が現れる。看板と同様、『松来軒』の名の書かれた暖簾を片手に。

「♪～～～……って、うおっ!?」

口笛を吹いて気楽な様子だったその人は、私たちの存在に気がつくと露骨に驚いた。まるで幽霊にでも出くわしたかのようなその態度

に対して、咲希は不満そうに抗議する。

「む～！　初対面で、それもお客さんに向けて『うおっ!?』なんて、失礼なんじゃないですか？」プンプン！

「おおう…す、すまねぇ。開店早々に客がいることなんて滅多にないもんだから、思わずびっくりしちまってよ。――そうだなあ…詫びと言っちゃなんだが、後で４人ともサービスしてやっから」

『これで手打ちにしてくれねぇか』と彼は言外に許しを乞う。

見るからにお客が「サービス」という甘～い言葉に弱いのをわかっている様子だ。女子高生となれば、この手の誘惑に殊更魅力を感じてしまうということも。

「やったー！　ありがとう、お兄さん！」

「あいよ。今用意するから中に入って待っててくれ」

言わずもがな、咲希はその筆頭だった。とても純粋な彼女らしく喜びを前面に押し出し、店員であろうその人にお礼を言っている。彼もまた満更でもない表情を浮かべながら、私たちを店の中に通してくれた。

如何せん外観のイメージが先行してしまい内装への期待値は低かったが、意外にも店内が綺麗で驚いた。カウンター席のみが設けられた一般的な造りだけど、整備と整理と清掃の手がしっかりと行き届いているのが一目でわかる。

「注文は？」

「ラーメン四つお願いします。…あと、どんなサービスしてくれるのかも教えてください」

「おう。うちは学割の対象外だが、麺の大盛りとかデザートを追加してやるぐらいならお安い御用だ」

「ならラーメン大盛りと」

「「デザートを四つで」」
「……即決かよ。わかった、大盛り一つとデザート（食後）にアイスクリームを四つだな」

へぇ…確かアイスクリームはチェーン店でも一番人気のデザートだったはず。それをサービスしてくれるなんて気前のいい人だ。隣で咲希が歓喜の声を上げている。

そうして注文を承ると、彼――村松　拓哉さんはせっせと準備に取り掛かっていった。手際よく動き続ける彼以外に人影はなく、湯気でいっぱいの厨房はまさしく村松さんの独壇場だ。調理のキレとテンポの良さは他の職人と一線を画し、具材を切り刻む音は狂想曲が如く激しく奏でられる。完成された極上のラーメンの図が、自然と頭の中に思い浮かんだ。

…そこでふと疑問が生じる。これほどの腕前を持ちながら、どうして彼はこの小さな店を切り盛りしているのだろう――と。

「ちょっといいですか？」
「？　なんだ。追加注文（オーダー）か」
「流石にそこまで食べないです。ただ、『松来軒』の実質的な総帥であるはずの村松さんがチェーン店の側で経営に携わらない理由を知りたくて」
「ああ～～……やっぱり不思議か？」
「はい」

私が思い切って疑問をぶつけると、まるでこの手の質問に聞き慣れたような反応を示す村松さん。作業の手を止め少しだけ考える素振りを見せた彼は、改めて口を開いて語り出した。

「確かに本家（うち）は古いしボロだし狭いしで今みたいに客はほとんど来やしねぇ。本店でも支店でもいいから余所へ移ったり、店をまるごと改

装したり～みたいなことも考えたさ。
…けど、それを相談したら親父は猛反対。『レシピを変えんのは手前(テメエ)の勝手だが、我が子同然のこの店からは死んでも離れねぇ。誰かに明け渡すことも絶対しない』ってな。始めは頑固だなぁオイとか思って呆れてたが、後々俺も考え直してみたんだ。俺の成長の軌跡とも呼べるこの店(こいつ)を手放すにはやっぱり惜しい。
――だから、俺はここで働いてる。初心を忘れないためにもな」
「…！」
「実家から都内六つのチェーン店まで全ての経営を担わなきゃならんのがちとキツいが、まあ…それでも毎日楽しくやれてるよ。レシピの特許が俺の手元にあるだけでも万々歳だ」

そう話をする村松さんの表情はとても活き活きとしていて、今の自分の仕事に心から誇りを持っているようだった。他人にどう思われようと己の意志を一貫してみせるその姿勢は私も見習いたい。

「――かあーッ、気持ち悪(わり)ぃ！　自分で言ってると恥ずかしいったらありゃしねぇ。
悪いな、変な身の上話聞かせちまって。すぐにラーメン作るからもう少し待っててくれ」

…なんて感心していると、彼は吐き捨てるようにそう言った。曰く、自惚れてるみたいで性に合わないらしい。全然自慢げな様子でもなかったし、むしろそのストイックな考え方に共感したことを伝えたら、村松さんは小さく「おう…」と返して作業に戻っていった。色白の頬が僅かに赤らんでいた姿からして、おそらく私の気持ちは伝わったと思う。

それから何分かたった頃――

「よっす村松。邪魔すんぞー」

「ラーメン二つだ。腹が空いてるから早く食わせろ」
「げっ」

今までピクリとも動かなかった引き戸が勢いよく開けられたかと思うと、二人の男性が入店してくる。一人はドレッドヘアー、もう一人は逆立った銀髪とかなり特徴的な見た目だ。
そんな二人に向けて、村松さんは心底面倒くさそうな表情を浮かべている。

「よりにもよって今来んのかよ…」
「おいおい、そんなげんなりすんな――って、なんだこの子たち」
「ほう。非日常的な体験に飢える余り、ついに勧誘に手を染め始めたか。…吉田、警察」
「もしもしポリスメン？」
「ちっげーよ！　純粋なお客さんだわ！」
「でもなあ…」
「村松だったらやりかねない」
「テメェらん中での俺の評価はどうなってやがるっ！」

……これ何の漫才？
私たちを話のタネにして、怒号にも似た壮絶なツッコミが店内を飛び交う。けれども、すごく険悪な雰囲気になっているわけではなさそうだ。その砕けた口調と憎まれ口を叩き合う様子からして、村松さんと目の前の二人が親しい間柄であるのがわかる。
ただ――

「すいません。友達がびっくりして固まってます」
「あ、悪い…」

唐突に響いた大声は流石の私でもうるさいと感じたほどだ。もう少しボリュームは抑えて欲しい。

「すまん。このバカ二人には後でよく言い聞かせておく。隣いいか？」
「ど、どうぞ」
「ありがとう」
「「おい。誰がバカだって？」」

再び一悶着起きそうになるも、村松さんとドレッドヘアーの男性は私たちを一瞥して思いとどまり、事なきを得た。すっごい形相で銀髪さんを睨んではいたけど…。
それから村松さんが調理の手を再開させると、手持ち無沙汰になった彼の友人二人に軽快に話しかけられる。

「俺は吉田　大成だ。すぐそこにある『吉田モーターズ』ってバイク店の跡取り息子。よろしくな」
「堀部　糸成（イトナ）。〝イトナ〟　でいい」

村松さんを含む三人は中学時代からの付き合いで、大学を卒業したり実家を継いだりしてもなおこの店を拠点に経営に関する相談・助言をし合っているのだとか。
たまの休日ということで、今日は本当はもう一人ここに来る予定らしいけど――

「そうだ、寺坂！　すっかり忘れてたがあいつ一体どうしたよ」
「ああ…それなんだが」
「寺坂なら秘書として強制的に駆り出された。電話越しに怒鳴り散らかしてたぞ」
「……なるほど、上官命令か。気の毒なこって」

イトナさんからの説明に、呆れと諦めの感情を孕んだ溜め息をつく村松さん。どんな人かは全くわからないけど、〝寺坂〟　という名

の三人の友人がかなり大変な目に遭っているのだけはひしひしと伝わってきた。
また吉田さんたちとの他愛もない会話が始まる。時々村松さんもカウンター越しに相槌を打ってくれるから、話しているのがとても楽しく落ち着いた気分になれた。
――そうして談笑している最中（さなか）、香しい醤油の匂いが鼻孔をくすぐった。
「できたぜ。ラーメン四つお待ちどお」
「わあぁ…！　おいしそ～！」
ごとり、と重量感ある音を立て目の前に置かれた丼を覗き込む。見た目こそ普通のラーメンだけど、醸し出す香りは見て呉れ以上にインパクトがある。嗅覚を駆使するだけでお腹がいっぱいになってしまいそうなほどに。
「（チェーン店のそれとは何かが違うような…）」
レシピ自体同じなのはわかっている。けれど、そう考えずにはいられない。
チャーシュー、ネギ、メンマにワカメに卵……鶏ガラスープに浸る何度も見てきたはずの具材（メンバー）を前に、それらに何か特別な意味が込められているのではないかと思慮深くなった。
「いただきます！　――ん～～、美味しい！　これすっごく美味しい！」
「！　ほんとだ。うまく言えないけど、チェーン店（シブヤ）で食べたラーメンより美味しいかも」
「たりめえよ。このレシピの生みの親である俺が直々に作ったんだ。美味くないわけがねぇ」

「よく言う。五年前までずっと不味いラーメンしか作れなかったくせに」
「ちげーわ。単に作ってこなかっただけだ」
「どっちも同じだろ」

もぐもぐもぐもぐ。

「意外…昔は不味かったって本当なんですか？」
「ああ。今はすげー息巻いてっけど、当時は経営難も相まって冗談抜きで酷かった。あんな昭和代表ラーメン、令和の今じゃあとても出せねえよ」

もぐもぐ。――よし、具材の次はスープと一緒に麺を頂こう。
スープの表面に漂う旨み成分と太麺をじっくり絡めたら、あとは噛み切らないように…一気に啜る！

ズズズズズッ！

「（これ、は…!?）」

初めての感覚だ。
もちもちで弾力のある麺は食べ応えがあり、なおかつ咀嚼するたびに芯まで染み込んだスープの旨みが解き放たれる。鼻腔に到達した風味はもちろん、麺の食感も極上なことこの上ない。チェーン店で出されているラーメンが霞んでしまうレベルの美味しさに、私は衝撃を受けた。
これぞまさしく神の御技…！　至高の領域…！

「……なあ。さっきからずっと険しい表情のままなんだけど、これ大丈夫か？」
「はい。志歩ちゃんラーメンを食べる時はつい真剣になっちゃうだけ

で、きっと今は美味しさをじっくり堪能してるんだと思いますよ」
「！　ちょっ、穂波っ…／／／」ゴホッゴホッ

横から飛び出た不意打ちに思わず咽せてしまう。
言ってることは正しいんだけど、私の胸中を丸々代弁されると流石に恥ずかしい。なんとか話を遮ろうとするも、口内に残るスープの残り香に気を取られていたせいでもう手遅れだった。

「へへっ、そうか。そいつは職人として冥利に尽きるってもんだな」

村松さんは一瞬驚き、次いで屈託のない笑顔を浮かべながらそう言った。
なんだか悪いことをした気がする…。集中の余りつい寡黙になってしまったけど、お客がキツイ表情（かお）でラーメンを食べている姿なんて作った本人からすれば気が気でなかったはずだから。
……やっぱり恩を仇で返したままというのはよくない。

「あの、伝えるのが遅くなってごめんなさい。
――ラーメン、すごく美味しいです。今まで食べてきた中で最高の味でした」
「っはは、〝最高〟とはまた大きく出たなあ。…嬉しい言葉だが、まだまだこんなもんじゃ終わらねェ。その〝最高〟の味も俺が近いうちにきっと塗り替えてみせるから楽しみに待っててくれな」
「！　もちろんです」

現状に甘んじず、さらなる高みを目指そうとする姿がLeo（わたし）／need（たち）と重なって見えた。……負けていられない、私たちも絶対にプロにのし上がってやる。
固い決意を胸に、まだ少し残っている麺を啜りスープを飲み干す。完食しきったその時には、お腹いっぱいの幸せな気持ちと暖かい真心が身体の芯まで染み渡っていた。